

輪島市三井新保遺跡

主要地方道七尾・輪島線改良事業に
係る埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

1983

石川県立埋蔵文化財センター

輪島市三井新保遺跡

主要地方道七尾・輪島線改良事業に
係る埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

石川県立埋蔵文化財センター

例 言

- 1 本報告書は石川県輪島市三井町新保に所在する三井新保（みいしんぼ）遺跡の緊急発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡は主要地方道七尾・輪島線の改良事業に係るもので、工事中に不時発見された。
- 3 本遺跡の発掘調査は石川県立埋蔵文化財センターが実施した。遺跡の発見は昭和57年8月20日で、9月6日から9月25日まで調査を行い、平田天秋（係長）、垣田修児、西野秀和（主事）が担当した。
- 4 発掘調査にあたって次の諸氏の協力・教示を受けた。
四柳嘉章（県立中島高校）、佐古 隆（県立輪島高校）、神戸一郎（県立町野高校）、輪島市教育委員会、石川県輪島土木事務所、（株）宮地組
- 5 遺物整理作業にあたって次の諸氏の教示を受けた。
荒木繁行（石川県埋蔵文化財協会事務局長）小林達雄（国学院大学助教授）、小島俊彰（金沢美大助教授）、松井政信、高橋修宏
- 6 石器の石質鑑定は金沢大学教授 藤 則雄博士の教示を受けた。
- 7 遺物の水洗、復元作業は石川県埋蔵文化財協会が実施した。
- 8 遺物の図化作業は本センターが行っている市町村文化財担当職員の長期研修生である滝上秀明（辰口町）、石橋克美（志賀町）が行った。
- 9 本書の執筆と編集は、藤、平田、西野が担当した。
- 10 本書の遺構、遺物挿図の指示は次のとおりであるが、変更したものについては挿図に示した。
 - (1) 挿図の縮尺
土器・石器（石斧・磨石・石皿）——1/3、石器（石鎌・スクレーパー）——1/2
 - (2) 方位は全て磁北を表示する。
 - (3) 水準は海拔高で表示する。
 - (4) 写真図版の復元土器は任意の縮尺であるが、土器片・石器は1/2、1/3の縮小である。
- 11 本遺跡の出土遺物および諸記録は、本センターが一括して管理している。

目 次

I	遺跡の位置と環境	1
II	調査に至る経緯と経過	4
III	層序と遺構	7
	1 遺構の配置 2 層序 3 遺物出土状況と出土土器 4 3号土坑	
	5 1号土坑 6 ピット群	
IV	出土遺物	18
	1 縄文土器 2 石器 3 土師器、須恵器	
V	まとめ	41

挿図目次

第1図	位置と周辺の遺跡	2
第2図	遺跡周辺の地形図 (1/10,000)	4
第3図	遺構配置図 (1/300)	8
第4図	土層断面図 (1/80)	8
第5図	土層断面図 (3G) (1/30)	8
第6図	遺物出土状況 (1/30)	10
第7図	遺物出土状況 (1/30)	10
第8図	縄文土器拓影 (1) (1/3)	12
第9図	縄文土器拓影 (2) (1/3)	13
第10図	第3号土坑実測図 (1/30)	14
第11図	第1号土坑実測図 (1/30)	15
第12図	F・G・Hグリッド実測図 (1/80)	16
第13図	縄文土器拓影 (3) (1/3)	19
第14図	縄文土器拓影 (4) (1/3)	21
第15図	縄文土器拓影 (5) (1/3)	25
第16図	縄文土器拓影 (6) (1/3)	27
第17図	縄文土器拓影 (7) (1/3)	31
第18図	縄文土器拓影 (8) (1/3)	32
第19図	縄文土器底部拓影 (9) (1/3)	33
第20図	石器実測図 (1) (1/3)	36
第21図	石器実測図 (2) (1/2)	38
第22図	土師器・須恵器実測図 (1/3)	40
第23図	北陸の地質概略図	42
第24図	三井新保遺跡出土の特徴的石材の最寄りの分布地	45

表目次

表1	石器一覧表	39
表2	三井新保遺跡出土石器の石質とその最寄りの産地	43
表3	穴水町曾福遺跡出土磨製石斧の石質と傾度、及び最寄りの産地 (藤、1981)	47

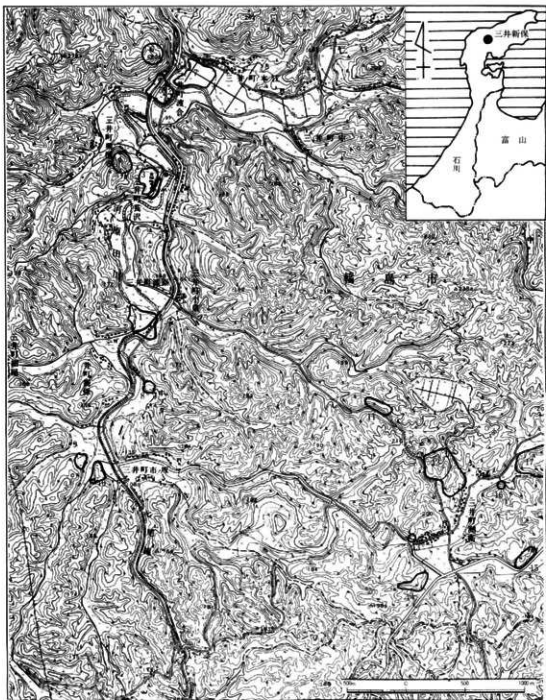
図版目次

- 図版1 航空写真(南からのぞむ) 撮影(株)セントラル航業
- 図版2 遺跡近景(北から)、調査前の状況(北から)
- 図版3 調査前の状況(南から)、調査終了の状況(北から)
- 図版4 第3号土壇(南から)、発掘区南端部の状況(西から)
- 図版5 土層断面(3グリット)、第3号土壇土層断面、土層断面(Cグリット)
- 図版6 第1号土壇(平安期の土壇墓)、土器出土状況(2~4グリット)
- 図版7 土器出土状況
- 図版8 調査風景
- 図版9 出土土器(1~14、30)
- 図版10 出土土器(15~32、173~177)
- 図版11 出土土器(35~74)
- 図版12 出土土器(71~169)
- 図版13 出土土器(178~220)
- 図版14 出土土器(222~254)
- 図版15 出土土器(253~316)
- 図版16 出土石器

I 遺跡の位置と環境

輪島市三井町新保ホの部通称ミコマイに所在する。輪島市は日本海に突出する能登半島の北部西方に位置し、東側は珠洲市、柳田村と西側は門前町、南側は穴水町、北側は日本海とそれぞれ境を接している。三井地区は七尾北湾側の穴水町と北部日本海側の輪島市街域とのほぼ中間の距離の地点に存し、それぞれ直線距離で測って約9.5kmである。河原田川沿いとその支流の仁行川、中川に沿って三井町仁行、本江、中、渡合、興徳寺、長沢、漆原、小泉、細屋、新保、市ノ坂、洲衛、内屋などの集落が点在している。穴水町と輪島市を南北に結ぶ、国鉄七尾線、主要地方道七輪線に沿って河原田川は北流し、七見川、小又川は南流している。これらの河川は洲衛、市ノ坂付近を分水嶺として、能登半島特有の低丘陵性山地を開析しながら樹枝状平野を形成し蛇行しながら日本海に注ぐ。周辺の山地は標高200m前後を測り樹枝状平野及び小谷に存する集落はほぼ海拔100m前後の高さにある。遺跡は、蛇行する河原田川に開析され小丘状をなし、周囲の水田との比高は高位で約5mを測る。主要地方道および国鉄七尾線によって古くに三分断されているが、その他の主要部分は畑地として良好な状態で残存しているものと思われる。今回調査を実施した縄文期の包含層は表面よりかなりの深部に存したことから残存部については表面採集はできなかった。しかし、地表では地点により須恵器、珠洲焼が採集され古墳～中世にかけての複合遺跡である。

まず本遺跡の周辺地域における遺跡分布状況を概観してみることにする。三井地区では現在のところあまり発見されていないが、地理的状況もあって今後に数多く発見される可能性がある。国鉄七尾線能登三井駅前西方約400mには興徳寺横穴古墳群（7基以上）、三井美登里丘遺跡が所在している。美登里丘台地は平野部との比高約20mを測り、その崖面の凝灰質の砂層水成岩を主とする岩盤に横穴古墳が営造されている。台地上では古墳時代前期の集落遺跡が所在している。本遺跡の発見は早く昭和23年に遡る。現在は三井中学校地となっており、その主要部分は消滅してしまったものと思われる。四柳嘉孝同校教諭により数回にわたり試掘調査が実施され若干量の遺物を検出している。またその上方の上野丘陵では興徳寺遺跡が所在し磨製石斧が単独出土している。三井町渡合付近では本江姫ヶ城遺跡があり同じく磨製石斧が単独出土している。国鉄七尾線、主要地方道七輪線にまたがって渡合の八幡神社の前には渡合遺跡がある。須恵器、土師器、珠洲焼の散布がみられ河原田川に三方を囲まれた本段丘上には平安時代から中世に至る遺跡が所在するものと思われる。また、河原田川上流の三井町洲衛では、窯跡、製鉄遺跡が集中する。通称ツンノコには洲衛窯跡群が所在している。この低丘を南西丘陵斜面には少なくとも三基以上の窯跡が所在するものと想定される。昭和40年にトレンチ調査が石川考古学研究会によって実施され、吉岡康暢氏により報告がなされ黒川2号窯式から戸津4号窯式への過渡的な様相が見られるとし平安中期の窯式名として「洲衛第1窯式」の設定がなされた。また、フタツヤ地内でも林道工事中に三基の窯跡が発見されたのであるが現在その位置については不明である。またオオジ



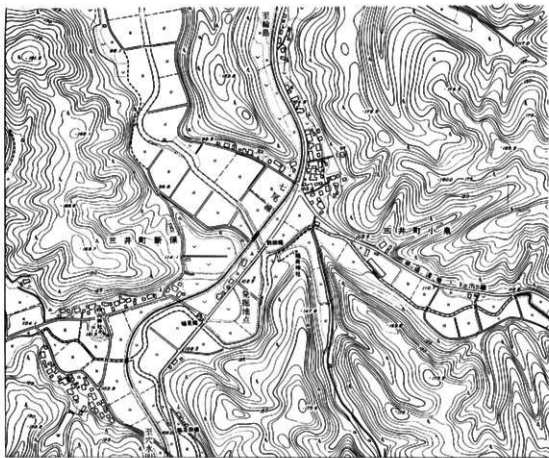
- | | | |
|------------|----------------|--------------|
| 1 三井新保遺跡 | 7 本江遺跡 | 13 河内中世墳墓 |
| 2 興徳寺南穴古墳群 | 8 キブタ遺跡 | 14 河内聖跡群 |
| 3 三井美登里丘遺跡 | 9 市ノ坂テンジンワツノ遺跡 | 15 " (地点未確認) |
| 4 興徳寺遺跡 | 10 市ノ坂ヤマザキバナ遺跡 | 16 河内大倉遺跡 |
| 5 沢合遺跡 | 11 河内タラ遺跡 | 17 河内タラ遺跡 |
| 6 本江姫ヶ城遺跡 | 12 " | |

第1図 位置と周辺の遺跡

ヤラ地内においても双耳瓶が単独出土しており、窯跡の可能性もある。また、その周辺では数多くの製鉄遺跡が発見されている。発掘調査がなされていないために内容については不明であるが、緩斜面裾部において炭化物、鉾滓、窯状遺構が散見される。今後この周辺部においては、多くの窯跡、製鉄遺跡が発見される可能性の大きい地域である。市ノ坂附近の通称ヤマザキバナの台地には縄文土器、フレークの散布がみられ縄文期の集落遺跡が所在するものであろう。対岸の通称テンジンウワノの畑地では須恵器片の散布がみられ、キブタ地内の台地上でも須恵器片が散布している。本江地内の七輪線、洲衛線、河原田川が交差する水田部分の河岸段丘上には、広範に土師器、須恵器、珠洲焼片の散布が見られ古代から中世に属する遺跡の存在する可能性がある。また、日本後紀には「大同三年冬十月丁卯。鹿能登国能登郡越蘇・穴水。鳳至郡三井・大市・待野・珠洲等六箇駅。以下要也。」と見え、三井町本江周辺に駅が設置されていたことが何われ、新保遺跡をはじめとし河原田川沿は古代の主要交通路であったと言える。(平田天秋)

II 調査に至る経緯と経過

本遺跡は、昭和57年8月20日に輪島高校の郷土研究同好会(指導 佐古 隆教諭)の生徒によって工事中に発見されたものである。穴水町で実施されていた西川島遺跡群の発掘調査に参加しての帰り路、偶々、主要地方道七尾・輪島線の工事現場を通り、切断された崖面に黒色土が露頭しており、その中より土器片を採集した。この連絡を受けた当センターは事業主体の土木部道路建設課に一時工事の中断を要請し担当職員が現地を確認することとなった。道路拡幅のための側溝工事により土器包含層が巾50cm、長さ120mにわたって削平されてしまい、その土も包含層ともども別地域の畑地へ搬出されてしまっていた。しかし、拡幅部分については、ほぼ包含層の上面で旧状のままの状態で遺存しているものと判断された。そのことを受けて遺跡の発見通知の提出を行うとともに今後の処置についての協議を続け、事業中の不時発見と言うこともあり9月6日より発掘調査を開始し9月25日に終了した。



第2図 遺跡周辺の地形図(1/10,000)

調査日誌

9月6日(月曜)晴 発掘予定地の草刈りを行い、周辺地形の把握のため踏査をする。道路側溝と現道路路肩との間は約3mほどを測るが、側溝に接する0.5~1.0mの間は削平されて包含層を失っている。グリッドは4mとし、岩盤が露呈していた穴水側に任意の基点を置く。輪島方向にグリッドをのぼし、丘陵地形が終る地点までに13個のグリッドとなる。延長52m、幅2~2.5mのトレンチである。2~4グリッドの攪乱土層および黒色土の発掘をはじめ。石鏃、石錐等の石器、土器片多数が出土し、縄文時代前期後葉蛸ヶ森式を主体とする包含地と判断された。

9月7日(火曜)曇時々晴 2・3グリッドに土器が集中している。丘陵内の小谷がはいり込んでいる地区である。4グリッドの黒色土から珠状耳飾片が出土する。5~7グリッドの表土層を除去作業、土器の出土は極端に少なくなる。

9月8日(水曜)晴 8~13グリッドまでの表土層をとり除く。包含層を形成する地点は少なく、岩盤がすぐに露呈した。小片となった須恵器、土師器が散発的に出土する。3・4グリッドを掘り下げてゆく。下層位では土器の出土量は少なくなってゆく。4グリッドから磨製石斧出土する。佐古 隆氏、輪島市教育委員会文化財係長が遺跡を訪問する。

9月11日(土曜)曇 2・3グリッドの掘り下げ。丘陵傾斜面に沿うかたちで土器が埋まっているのが見られ、復元可能なもの1例が認められる。佐古 隆氏と輪島高校1年生3名が応援にきてくれた。

9月13日(月曜)晴 2・3グリッドの掘り下げ。小さな土器片が重なり合うようになっているために、作業が思うように進展しない。

9月14日(火曜)晴時々曇 1~3グリッドまでの掘り下げ。2グリッドから磨製石斧、小型磨製石斧片が出土する。

9月15日(水曜)曇時々晴 輪島高校の佐古 隆氏と郷土研究同好会のメンバー4名、町野高校の神戸一郎氏と生徒4名が応援にきてくださる。2・3グリッドの土器集中区の掘り下げと、平安時代の土壇墓の検出を行う。

9月16日(木曜)曇時々晴 5~15グリッドまでの遺構検出を行い、写真撮影をする。土器集中区の写真撮影の後、10分の1の縮尺で平面図を作図する。四柳嘉幸氏、佐古 隆氏来道。

9月17日(金曜)晴 土器集中区の平面実測を行い、レベル記入、遺物の取り上げをする。3・4グリッドにまたがる大きな落ち込み(3号土壇)を検出する。穴水寄りの丘陵端部での発掘区域を設定し、表土除去作業をはじめ。

9月18日(土曜)曇 側溝をつくる際に運び出した2・3グリッドの土の所在が判明したので、遺物採集のために本江に向う。石鏃3点、磨石1点を含む遺物、整理箱で2ケース分が採集できた。土器集中区の掘り下げを行い、復元できる資料1点と珠状耳飾片1点を新たに検出する。

9月22日(水曜)晴 3号土壇の掘り下げ。地山土と黒色土の層序から風倒木痕と推定される。

9月23日（木曜）曇 3号土塚の土層断面図、1～6グリッドまでの土層断面図を作図する。

9月24日（金曜）曇 3号土塚の畦畔をとりのぞき、写真撮影、平面図を作製する。南端発掘区の遺構精査を行い、写真撮影をする。ピットが幾つか検出され、包含していた土師器から古墳時代以降のものと想定された。

9月25日（土曜）晴 南端発掘区の平面実測を行い、現地作業を終了する。

調査協力者名簿（敬称略、順不同）

佐古 隆（輪島高校教諭）、四柳嘉章（中島高校教諭）、神戸一郎（町野高校教諭）

中島 泉、日吉芳弥、稲木武治、加本新一（輪島高校郷土研究同好会）

刀祢光広、江上由宏、才式 隆、土谷 衛（町野高校）

岡浦文三、東きよこ、前田ときこ、大高はるこ、山岸しずこ、谷内ついで、中済もよ、漆谷ふき、大高うめの、西畑みさの、道辻清乃、酒谷ゆき、岡浦久子（三井新保・小泉地区有志）

III 層序と遺構

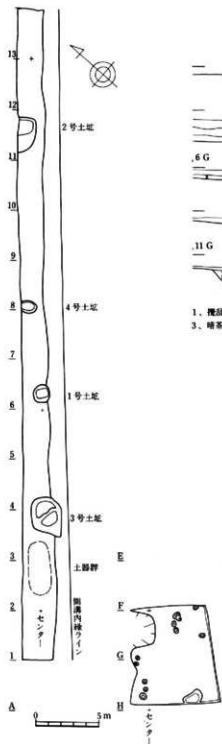
1 遺構の配置

三井新保遺跡は標高103~104mをはかり、河原田川をのぞむ舌状台地に立地している。周囲は標高170~200mの低丘陵性山地がとりまき、蛇行して北流する河原田川に開析された狭小な谷平野が台地周辺に展開している。今回の発掘調査で判明した縄文時代前期の包含層の状況から遺跡の台地に対する河原田川の氾濫にかかる大きな変化は小さなものであると理解され、台地をまいて大きく蛇行する河原田川の位置は当時とさほどの変換はないものと想定される。しかし、穴水町寄りの樋見橋付近での台地をみると、急崖地形となっているのが知られ、河原田川が浸食したものと考えられ、舌状台地の穴水町側は若干のひろがりをもっていたものであろう。舌状台地は大きく見ると、北方が約130m×約80mの規模でなり、2~4mの比高をもって南方の平坦地が約150m×約70mの範囲でひろがっている。北方の台地での観察は十分ではないが、遺跡の所在する可能性は大きい。南方の平坦地の中央付近には国鉄七尾線と主要地方道が切り開かれているが、主要地方道、すなわち今回の調査地点は、北方にひらいた小谷地形をなしている位置にあたる。南方の台地の微地形を見ると、樋見橋側と三井町新保の集落が所在している南方側、東方側が最も高く、北方向にむけてゆるやかに傾斜面を形成し、北側の中央付近にむかう斜面と複合していると言える。北の小谷側から見ると、弧状をなして平坦地が南に展開していると言えよう。

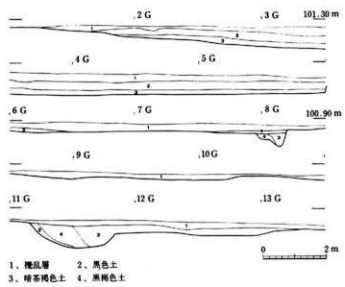
調査区はきわめて限定された形でしか設定していない。小谷を含んだ台地上を南北に縦断する主要地方道七尾・輪島線の拉幅部分は、西方台地側に約4m程度くい込む形でなされ、台地との法面を考慮すれば5mに近い幅で削平するものであった。8月20日の発見時点では、現道と同レベルに近い状況で拉幅部分が削平され、道路側溝をとりつける部分約2m幅では、さらに一段深く削平が実施されコンクリート打ち、および、暗渠部分のコンクリート蓋が取り付けられた状態にまで工事が進捗していたので、台地斜面に位置する包含層および遺構は厚い表土層が除去されただけであったが、台地上へ高まる地山面は大きく削平されていた。生活面と考えられる台地上と包含層との直接的なつながりをつかむ事はできなかった。

調査はさきの状況から、新たに作られた側溝と現道路肩までの幅2~2.5m、延長52mのトレンチ調査である。樋見橋にのぞむ台地南部分では削平が実施されていなかったため、約6m×約7mの小範囲で発掘を行っている。調査グリッドの設定は包含層が遺存していた地点を基点とし、4mごとに区切られたちで北方へ順次のばしていった。1~13グリッドとして区分し、南端地区へはやはり4mごとに区切りアルファベットを使用している。

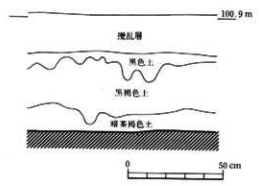
検出された遺構は平安時代の土壇墓1基、風倒木痕と見られる土壇3基がトレンチ部分で、古墳時代以降のピット群を南端調査区で得ている。縄文時代前期のプライマリーな包含層は2~5グリッドまでの範囲で遺存し、濃密な部分は2・3グリッドにかけてであった。4・5グリッド



第3図 遺構配置図 (1/300)



第4図 土層断面図 (1/80)



第5図 土層断面図 (3 G) (1/20)

では希薄になる傾向が認められる。平安時代の土壌墓は発掘区の中央付近6グリッドで検出しているが、発掘区全体では該期の土器は少なく集落址の範囲には含まれていないものと判断される。風倒木痕は3・8・11グリッドの3ヶ所で見られ、3・4グリッドにかかる3号土壌の黒色土中から縄文前期の土器片を得た他は遺物の出土は皆無にちかい。黒色土と地山土の関係をみると、北東方向に倒れたものと理解され、開析谷を吹きぬける風の方向を想定する事ができる。南端発掘区では縄文時代の遺物は検出する事はできず、土器集中区をのぞむ台地中央付近に縄文前期の生活址が遺存していると考定しておきたい。古墳時代以降の生活址は、縄文期のものを取りまくようなかたちで台地縁辺に展開しているものであろう。

なお、調査期間中に土器集中出土区(2・3グリッド)に隣接した削平部分の掛土の移動地点が判明したので、遺物採集を実施している。

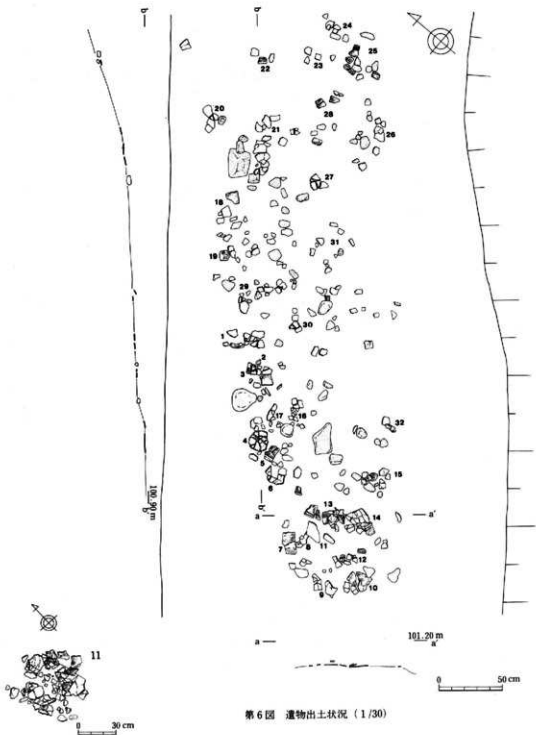
2 層 序

層序の把握は不時発見であり、表土層が削平されてしまっていたので詳細にはつかめない。しかし、削平法面には観察しやすいかたちで土層断面が露呈していた。Bグリッドから1グリッドにかけて地山面が傾斜をつよめる位置にあたり、Cグリッドから南側は30~50cmの表土層(耕作土)、濁黄褐色土をのせているだけであり、明快な黒色遺物包含層はとらえにくいと言えるが、地山面が急激に落ち込んでいる2~5グリッドにかけては、1m以上の暗褐色砂質土層が包含層の上部に厚く堆積し、6~13グリッドにかけては層厚を減しながら北方向へ伸びてゆく。現道路肩での層序でみると、10~20cmの擾乱層が黒色土層をおおっている。出土する遺物は皆無に近い。縄文時代前期土器を包含する層は、1グリッドの北端からはじまり、6グリッドの半ばまでの延長約19mまでの範囲であり、北方向に向けて若干の傾斜を持っている。遺物包含層は細かく見れば黒色砂質土層と黒褐色弱粘質土層に分層する事ができ、その境界断面では蛇行する線形を認める事ができる(第5図参照)。黒色砂質土層は5~10cm、黒褐色弱粘質土層は25cm前後をはかり、地山漸移層の暗茶褐色土層約10cmにおいて、茶褐色粘質土の地山面にとどく。

遺物の包含状況を見ると、黒色砂質土層においてはほとんど認められず、黒褐色弱粘質土層の上位に位置しているものと認められたが、4~5グリッドにかけては下層位になるようであった。これは地山面の傾斜に対応するものと考えられる。地山漸移層ではまったく遺物を包含していない。これらの事から、黒褐色弱粘質土が堆積しはじめてから若干の時期を置いて、縄文前期の遺物の包含がはじまったものと考えられ、黒色砂質土が形成されたのは縄文前期以後の時代と推定される。

6~13グリッドまででは表土層が削平されてしまい、1~5グリッドとの明確な関連はつかみきれない。

7・8グリッド、11グリッドで検出された土壌周辺では、若干の層位の乱れを認める事ができ



第6図 遺物出土状況 (1/30)

第7図 遺物出土状況 (1/30)

るものの、出土遺物がない事や上層の層序との関連がつかみきれない点から、明確な所属年代を提示するまでには至らなかった。

3 遺物出土状況と出土土器

縄文前期の遺物は、層序の項で記述したように、黒褐色弱粘質土に包含され、2グリッドから3グリッドにかけての約5mの範囲に密集して出土した。土器はその下位に別個体の土器があるという状況を示すものは少なく、平面的のびひろがっていると言える。平面的な展開を示しており、南側が高く北に向けて傾斜をなして堆積しており、その間のレベル差は約40cmを測る。

出土した土器のなかで復元する事ができたのは2個体あり、ともに南端付近に位置していた。北側に向かうに従い破片の大きさが小さくなり、接合しえる状況をとどめているものも少なくなる傾向を示しており、南側に捨ておかれた土器が傾斜面に沿うかたちで、2次の堆積をなしたのが北側部分ではないかとの想定をしている。それは、土器に混在している礫の大きさが北方にゆくに従い小振りになる傾向にもあらわれていると考えられよう。

石器の出土で特色となる点は記し難く、土器片に混じり合う状態での出土を見るのみで、1地点に偏在するという事はなかった。塊状耳飾の出土も他の石器と異なる点是指摘できない。土器の集中区の下層での遺構の検出はなかった。

本遺跡で得られた遺物は整理箱で7ケース分にあたり、該期の遺跡では多量と言えよう。この7ケースのうち2ケースが削平されて移動していた土の中から採集したものではあるが、状況等から発掘地点と同一と考えられ、限定された地点における遺物の出土は、集落内における捨て場としてとらえられよう。捨て場とするならば、丘陵内の谷地形の在り方が注目され、傾斜面のゆるやかで広い北西側と傾斜の強くなる南東側の地形の違いが浮かび上がってくる。この傾斜の違いから住居址の位置を想定するのは冒險的ではあるが、南東側の畑地となっている地区に存する可能性が高いと考えている。

須恵器・土師器・珠洲焼の破片は小片となっているものが大部分であり、攪乱土層からの出土で占められている。遺構からの出土では、1号土壇から須恵器杯、南端発掘区のピット内から土師器甕口縁部片が得られている。全体を通して、図示に耐えるものは少ない。

第8・9図は第6図で示した土器集中区のなかで、一定程度のまとまりを持っていたものを抜き出したものである。後節で記述する出土土器との明確な層位による差は、十分にはとらえきれないのであるが、平面的な1群のまとまりとして図示した。遺物番号と対になる番号は、遺物とり上げ番号であり、第6図と同一の数字である。

1は口径24.4cm、現器高16.5cmをはかる。直立して立ち上がる口縁部に3条の貼付線文をつけ、貼付線上に列点をつけるもので、本遺跡では唯一の手法形態を持つものである。口唇は平坦にナデ調整が加えられている。



第8図 縄文土器拓影(1) (1~29) (S = 1/3)



第9図 縄文土器拓影(2) (30~34) (S = 1/3)

2～6は縄文地文に貼付線文がつけられているもので、貼付線文は比較の間をあけてつけられている。2では平行する貼付線文の間に相対する弧線文が加えられている。器表には煤が付着している。内面へのナデ調整は丁寧である。

7は4条の貼付線文をつけるもので、上側縁に弱いナデ調整と貼付線上の列点を加えている。内面では粘土紐積み上げ痕がのこり、口唇部では貼付線をつけた際のほりつけ痕を見る事ができる。8の内面は凹凸が目立ち、ナデ調整はやや粗雑となっている。

10は微隆起線文をつけるもので、口唇は平坦に調整されている外反気味の口縁である。微隆起線文の方向、間隔は一定せず粗雑である。色調は暗褐色を呈し、胎土、焼成は良好である。

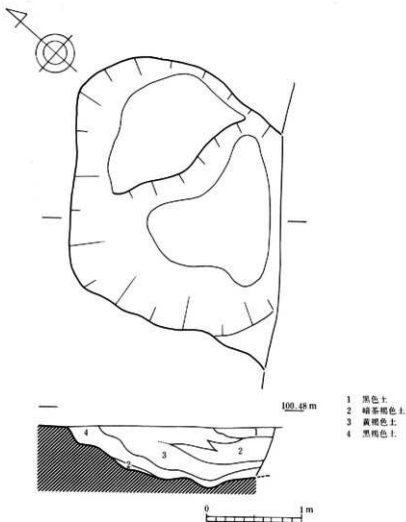
13は3条の貼付線をつけるもので、上位置にあるものは口唇部へはね上がっている。貼付線は太さをはっきりと判別できるもので、それぞれ上側縁へのナデ調整が顕著である。口唇は平坦にナデ調整が加えられ、内面への調整も丁寧である。茶褐色を呈し、胎土、焼成とも良好である。

14は2条の貼付線をつけるもので、貼付線に稜が引かれる程に入念に周辺部分へナデ調整が施されている。上位の貼付線は口唇上へはね上がってつけられている。暗褐色を呈し、胎土に砂粒は少い。内面の調整は粗いと言える。

15～17の3点は同一個体片と考えられるもので、明褐色を呈し、胎土に砂粒は少く良好である。波状口縁をなす深鉢で、間隔の開いた貼付線文がつけられている。波頂部はΩ（オメガ）状の突起が内屈気味につけられ、口縁端部につけられた貼付線上にはナデ調整が入れられているが、下位の貼付線への調整は粗い。

18は平行線文が引かれているものであるが、若干のくびれ部が認められ器形は判然としない。

19～22は縄文施文のみの土器片で、20、21の口唇には縄文が、22では列点がおかれている。



第10図 第3号土坑実測図 (1/40)

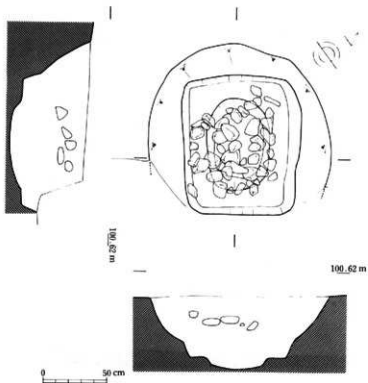
24は外反気味に立ち上がる口縁を持つもので、波状口縁となる可能性がある。内面には押さえによる凹凸が目立ち、横ナデ調整はやや粗雑である。

30は復元された唯一の土器で、口径27.8cm、器高37.6cmをはかる。

4 3号土壇

3・4グリッドにまたがる位置で検出したのが、3号土壇である。南側が道路側溝にかかるため、全体での平面プランはつかみ得ないが、ほぼ楕円形状を呈するのであろう。南北方向での長径310cm、東西方向の短径が260cmをはかり、深さは検出面から65cmをはかる。床面は平坦ではなく、起伏が大きい。壁の立ち上がりは北東部分では十分にはとらえきれていない。

覆土の堆積を見ると、西半部分では黒褐色土が縄文前期の土器片を包含して最下部にまでつながっている。黒褐色土中に含まれる土器は、壁の立ち上がり部分に限定される。色調も最下部では黒褐色土が弱くなり暗茶褐色を呈しているが、その境界での分層は困難であり漸移的に変化してゆく。覆土の大部分を占めるのは、黄褐色を呈する地山土で、暗茶褐色土が喰い込むようなかたちで入り込んでいる。



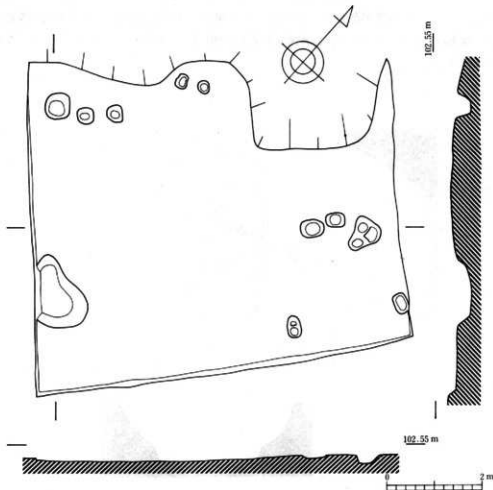
第11図 第1号土壇実測図 (1/30)

以上の平面プランや土層の状態、遺物の出土状況から、風倒木痕と判断して大過ないと思われる。8グリッドの4号土坑、11グリッドの2号土坑も同様の性格のものと考えられる。

5 1号土坑

1～5グリッドまでは、黒色土、黒褐色土が堆積し、地山面が傾斜しているのであるが、6グリッドからは地山面が高くなり、暗茶褐色粘質土に砂質岩盤が介在する形に変化を見せる。1号土坑は6グリッドで検出されたが、東方部の一部を削平工事によって損壊されていた。

平面プランは略楕円形状を呈するものと見られ、短径142cm、長軸径約160cmと想定される。検出面から33～38cm下がったレベルで、長方形プランの掘り込みを検出した。楕円形プランの掘り込みは皿状を呈する掘り込みであるが、長方形プランでは急激な立ち上がりを見せる。長軸110



第12図 F・G・Hグリッド実測図(1/80)

cm、短軸90cm、深さ15cmをはかる。楕円形プランの検出面から約8cm～27cmの下位に、拳大の礫40個以上が集中して検出され、ほぼ長方形プラン内におさまる位置にあたる。土壇床面の中央部分には、長径73cm、短径9cmをはかる楕円形プランの地山の変色部分が検出されているが、礫の集中はその楕円形プランと重なるものと言えよう。土壇内の覆土は黒色土一層で識別される。出土遺物は墨書土器1点（2片に割れている）を礫群の周辺から得られたにすぎない。

6 ビット群

丘陵南端、河原田川にのぞむ地点で設定した調査区では、幾つかのビットを検出している。1グリッドから南西方向へ24mの地点で、かろうじて削平工事着手前の地区があり、削平予定地約48m²について発掘を実施した。現道路にのぞむ部分では大きな攪乱が認められたが、畑地として利用されていた部分には、ビットが遺存していた。層序は耕作土の15～25cm程度が、黄褐色砂層岩盤および茶褐色粘質土の地山面に堆積しているのを認めるのみで、遺物包含層を見る事はできなかった。検出できたビット群は比較的小振りのもので、浅いものが多い。遺物を包含していたビットは南端近くのビット3個と土壇状のもの1個で、土師器片が見られた。

IV 出土遺物

1 縄文土器

本遺跡から出土した遺物は整理箱で7ケース分であった。その大半は縄文時代前期後葉の土器片で占められ、少量の石器がともなう。須恵器、土師器、珠洲焼は極めて少量である。以下、縄文土器を文様を主として分類したものを略述する。なお、土器は口縁部片を主としてとり上げ、できるだけ全点を網羅するようにつとめた。竹管文を持つものは胴部片であろうとも図示した。

第1群土器

1類

縄文地に粘土紐を貼付するもので1類をもうけた。器面を調整する過程で生じた隆線文ではなく、粘土紐を貼りつける事によって文様とする点で見れば、貼付線文として把握すべきものと思ふ。全体をうかがい知れる資料は第8図1で示したように、外傾して立ち上がるシンプルな器形の平縁の深鉢だけであるが、細かく見れば小波状口縁のものも見られ、口辺部が内傾気味のもの、外反傾向のものなどが知られる。しかし、全体のプロポーションとしては第8図1の器形と見られよう。貼付文の条数は2～3本でとどめられ、口唇部と接する位置に置かれるものと、若干の間隔をあけるものとの顕著な差異を見てとる事ができる。貼付線文に対する加飾の違いによって細別を行った。

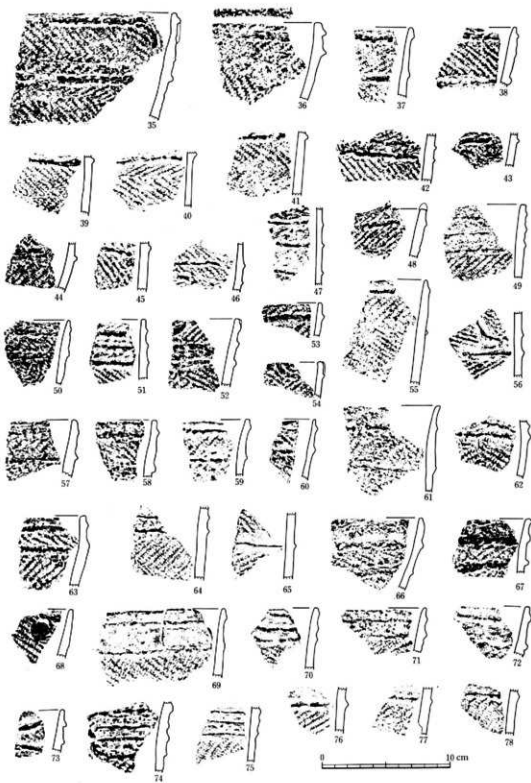
A(1)

貼付線文上に、横位の押圧列点文をつけるもの。その出土点数は少なく、第8図1を上げるにとどまるが、同一手法をとるものは第2類に分類したものに認められ、口唇部分に施すものも見られる。

B(2～4、35、36、41、56、58～62)

貼付線文を器面に押えつけただけのものであるが、押圧により列点文状を呈するものや、断面が粘土紐の丸身を保っているものなどの細かな違いを指摘する事ができる。

35は粘土紐の押圧がそれほど強くなく、丸身をもった断面を見る。口唇近くのもの、若干の間隔を持って平行位置に置かれた2本で成り、孤線をなすと見られるものが上下をつないでいるようだ。縦位にある貼付線文の始まりが明瞭に見てとれる。地文に羽状とした縄文が施文される。色調は暗褐色を呈し、胎土に若干の砂粒を含む。内面の調整は粗く横ナデが入れられ、粘土積み上げ痕が良く観察できる。36は撚りの大きな縄文が施文されたもので、貼付線文上に規則的な押圧を加えており列点文風に見える。口唇上には縄文が施文されているが、器表面に施文されているものから見ればはっきりとはせず、乾燥が進んだ段階のものと考えておきたい。色調は茶褐色



第13回 縄文土器拓影(3) (35-78) (S = 1/3)

を呈し、胎土には粗粒砂が目立つ。内面の調整は砂粒が表面に見える状態にあり、粗雑な横ナデ調整である。35・36はともに内傾した口縁形態をとっている。貼付線文に加えらるる調整が類似しているものとして、37~44を上げる事ができるが、42、43は貼付線文が細目で、若干の蛇行を見るところから後出的な印象も受ける。内面の調整は42を除いて、粗い横ナデ調整が行われているようだが、器面の荒れが目立つ。

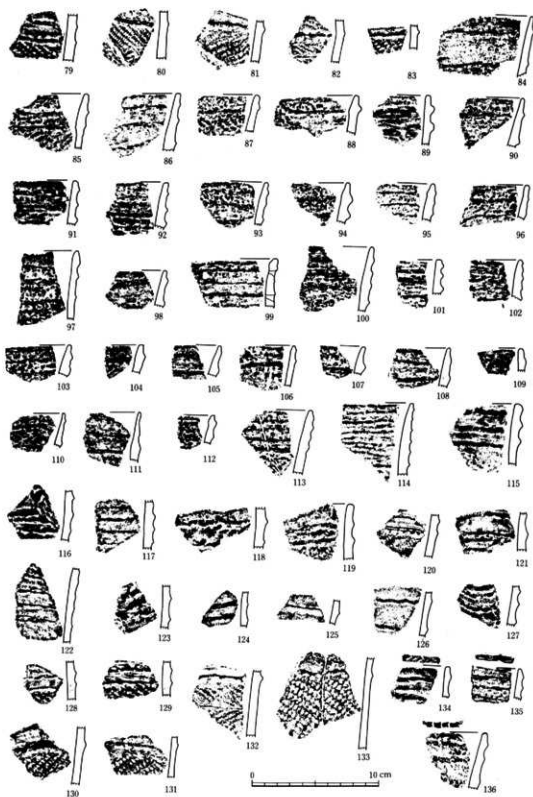
C (5、6、48-56)

貼付線文に押圧を加えて押しつけるために、断面が三角形を呈するものである。貼付線文の稜線は直線ではなく、微妙な線形を持つのが通有で、指頭による押圧を想定させる。48は口唇部分に小突起をのぼしているが、波状口縁となる可能性が高い。49は等間隔に貼付線文をつけるもので、口唇部分は平坦な面取りを行っている。51も三本単位の貼付線文をつける類似した口縁部片である。50は貼付線文のおさえがやや粗雑に流れている。52も同様の3本単位ではあるが、口縁端部の貼付線文が弧状を描いて口唇部にはね上がっている。54においては逆位置にあたるが、口唇部へカーブする貼付線が見られる。口唇部は平坦に調整がなされ、貼付線文のつづきが盛り上がり、口縁部内面にまでその残滓を見ることができ。色調は暗茶褐色を呈し、胎土に微砂粒が混和している。遺存状況は他と同様に良とは言えない。53の色調は淡黄褐色を呈し、胎土、焼成とも良好である。

D (57-65)

貼付線文に押圧を加えたあとに、貼付線文の上半あるいは下半に横方向のナデ調整を行うものをまとめた。口縁部の形状では波状をなすものではなく、全てが平口縁を呈す。口縁は直立あるいは外傾するものが多く、内湾形状をとるものは1例であった。

57は貼付線文上の上半に横ナデ調整をなしているもので、断面形はC種と同じく三角形をなし、蛇行する稜線を持っている。貼付線文の下半では、押圧を加えた列点状のものを見るが判然とはしない。色調は明るい茶褐色をなし、胎土には粗粒砂が見られ器表面から脱落した痕跡を認める事ができる。内面の調整はやや粗い。58は口唇に面取りを施しているもので、口縁部上位にある貼付線文の上半から口唇までの狭い部分ではあるが、横ナデ調整によって縄文地文がけさされている。貼付線文の下半では、器表面との境界をはっきりと見る事ができ、単に押圧したのみであると思われる。外表の色調は暗褐色、内面は茶褐色を呈している。内面の調整は横ナデが入れられ、焼成は良好である。59は2号土壇から出土したもので、外傾して立ち上がる口縁である。貼付線文上のナデ調整は上半のみになされていて、口縁部分は無文となっているのは42と同様であり、貼付線文間の無文化を想定させるものである。色調は明るい茶褐色を呈しており、胎土は精選されていて砂粒は少ない。焼成は良好であるが、遺存状況は良くない。60は口唇にむかって徐々に器厚を減じてゆき尖り気味の口唇部を持つ。2条の貼付線文の上半部分に横ナデ調整が施され、口縁端部は無文化し、貼付線文間においても下半の縄文地文が消えている。61は口唇に向けて器厚を減じ、端部が大きく外反する器形を持つが、基本的な器形としてはバケツ状を呈するもので



第14図 縄文土器拓影(4) (79~136) (S = 1/3)

あろう。口縁部を形成する粘土の継ぎ足しは、内面から外へむかう形で行われているのが、2条目の貼付線の位置で見ることが出来る。貼付線文の1条目から口唇にかけては縄文地文が消され、2条目の上半部分にも粗い横ナデ調整を見る事が出来る。内面の調整は口縁、胴部におけるナデ調整の密度が異なり、胴部はやや粗雑となっている。63は口縁端部で内屈するタイプで、本遺跡では稀な器形を呈している。2条目の貼付線文の下半に横ナデが入れているのは、上半部に施されるのが多いなかで目を引く。内面には炭化物の付着が見られる。器表面は全体に磨耗がみられ、口唇部分に面取りがなされたかどうかは判然とはしない。外表の色調は濁茶褐色を呈するが、内面は暗褐色をなしている。胎土には微砂粒が混和し、焼成はややあまい。64の貼付線文は低く小振りのものであるが、押圧を施している状況を観察する事が出来る。貼付線文の間隔が狭くなっている点に注意される。器表面には煤が付着している。器壁は9mmをはかり、厚手の類に含められる。

E (66~68)

A~D種に含め得ないものをE種とした。

66は内傾気味に直立する口縁で、1条目の貼付線文上には縄文が押圧され、2条目の貼付線文の上半に押圧の際にできたものと想定される刻目が並んでいる。横ナデ調整は貼付線文の上半からではなく、貼付線文の端にかかるとして施され縄文地文を消している。2条目についても貼付線文にかからない同様の手法が施されている。口唇部は弱いながらも面取りが入れられているようだ。色調は暗褐色を呈し、胎土には微砂粒が多量に含まれている。内面は粗い横ナデ調整が施されている。67は外傾気味に立ち上がる口縁で、口唇は面取りが施され、太目の貼付線文がつけられている。貼付線文への調整はB~D種で見られるものではなく、貼付線文の上端部に加えられるもので、断面形を誇張して見るならば台形状をなしているものである。外表の色調は暗褐色、内面は明褐色を呈している。貼付線文の2条目のあたりで器壁が厚くなっているが、内面に新たに粘土を加えて調整しているのが観察される。外周には煤がわずかに付着し、暗褐色を呈しているが、内面は明るい褐色をしている。本遺跡の土器では外周と内面の色調が極端な差を持つものが多い。68はLRの縄文地文に径2.4cmの円形浮文および口唇近く的位置に貼付線文を置くものである。縄文のくばみは他の土器に比較して深く、器面の柔かい段階での施文が想像される。円形浮文は中央部がくぼんでおり、円盤ないしは球形にしたものを押圧したのであろう。円形浮文の右下から貼付線文がのびてゆくように観察されるが、小片のため判然とはしない。

2類

平行する貼付線文の間を無文化するもので2類とした。粘土紐の貼り付けをより確実に行う事から、1類Dのような貼付線文上への横ナデ手法が口縁帯全体にまで拡大したものである。1類土器と比較して貼付線文の条数が増える傾向が知られる。貼付線文へ加えられる横ナデ手法の違いによって細別した。

A (69~83)

貼付線文の上半部分に顕著な横ナデを施し、口縁部および貼付線文間へも同様の手法を施すものである。胴部との境界にある貼付線文の下半部分へ、目を引く横ナデ調整は行われず、貼付線文の断面形は偏平な三角形を呈していると言える。

69は平行する2条の貼付線文の上半部に丁寧なナデを施し無文化するもので、口縁帯は器壁が薄く仕上げられ口唇にむかって尖り気味となっている。口唇には平坦面をつくり出すようなナデ調整が加えられている。色調は明るい茶褐色を呈し、胎土には粗砂粒が混じるが焼成は良。70は3条の貼付線文が置かれ、上位のそれは口唇部へ伸び上がるようだ。口唇にはやはりナデ調整が加えられている。内面の横ナデは粗い。71・72は尖り気味となる口縁帯に2条の貼付線文が置かれ、上位のそれは上下とも調整されるが、下位への調整は上半部に限られている。貼付線文の断面を見ると、上位は正三角形、下位は上半が長い偏平な三角形状をなす。73は口唇部へ伸びる貼付線文は、紐の形状を良くとどめているもので、下半では丸味を帯びている。ナデ消されている縄文地文をかううじて見る事ができる。口唇には平坦面を持つようだ。74は口縁端を欠いている4条の貼付線文を置くもので、上位から最下位にかけて縦位の貼付線文が置かれている本遺跡では唯一の例である。貼付線文は高さ、幅ともやや不揃いで、内側の2条が両側縁をナデているが、上下にある貼付線文は上半部をナデるにとどめられている。縦位の貼付線文は若干の曲線を描いて、平行貼付線文が置かれた後に貼り付けられている。色調は暗褐色を呈し、胎土に砂粒は少なく良好と言える。75は口縁端を欠いている3条の貼付線文を持つもので、70、71、74と同様に貼付線文の間隔が狭くなっている事が注意される。76~83の8点の資料は口縁帯と胴部の境界に置かれている貼付線文と想定できるもので、貼付線文の下半部に調整が加えられていないものである。76は茶褐色を呈し、胎土には粗粒砂はなく良好である。内面へのナデ調整はやや粗い。79は2条の貼付線文の断面形は丸味を持ったものとなり、つまみ上げて(?)、断面を三角形にしようとする意欲が失なわれたものと解したい。内面の色調は淡茶褐色、外面は褐色を呈し、胎土は良好。81の貼付線文の下半部には、文様と斜行する位置で5~9mmの刻目が認められ、1類土器で数例が知られるが、2類Bの多条化したものに多く出現していると言え注意すべき刻目と考えている。83は器壁が比較的薄くなっており、1類Dに含むべき口縁端に近い破片とも考えられる。

B (84~133)

貼付線文が1類に比較して低くなり、浮き上がるような印象が薄れているものである。Aとの差異は既述したように貼付線文の上半および下半の両方向にナデ調整が加えられている点で、胴部との境界に置かれた貼付線文がそれを良く表している。また、1類、2類Aとの概観での比較で見ると、貼付線文の多条化すなわち2~3条であったものが4~6条と増加し、間隔が極めて狭くなっている事が注目され、貼付線文へのナデ調整の有無での分類とは別に、条数と間隔による分類手法も有効な視点とも想定される。

84は尖り気味の口縁部片で、間隔の開いた貼付線文がつけられている。80、81でも見られるのであるが、器壁が表裏に分離するような状況を呈している。内面には指頭による押圧痕をのこし

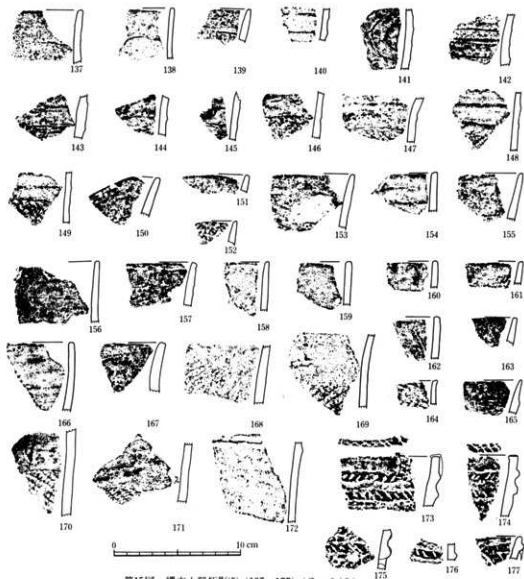
たまま横ナデ調整が施されている。暗褐色を呈し、胎土、焼成ともやや良くない。85は口縁部の器壁が7mm、胴部のそれが5mmを測り、口唇に向けて尖り気味の傾向が多いなかで特異な形状を示している。口縁部の内側へ新たに粘土を加えたものと想定される。口縁端に近い貼付線文は口唇に向けて伸び上がっていくようだ。86の貼付線文はそれ程高くはならず、貼付線文下半から調整が目立っているもので、胎土に5mmに近い砂粒が含まれている。外周に煤が付着している。内面のナデ調整は比較的丁寧になされている。87は間隔の広い貼付線文2条が見られ、稜線のように鋭く突出している。外面全体に厚く煤が付着している。88は高く明確な貼付線文がつけられているもので、85と同様に口唇に伸びてとどまる。内面への調整は外周のナデ調整と比較しても粗雑と言える。明るい褐色を呈し、胎土には砂粒が含まれやや不良である。89は貼付線文の高くて太いタイプで、地文を無文化した後に貼付した可能性が高く、細別すべきかも知れない。90は尖り気味の口縁部片で、口縁端部に幅の狭いナデ調整痕が見られ、口唇部分への調整よりも後で行っているようだ。91、94はともに太目の貼付線文をつけるもので、94には口縁端部を外側から継ぎ足している状況が見られる。91には口唇部に面取りが行われている。92は遺存状態が良好な資料で、断面三角形になった貼付線文間のナデ調整を良く観察する事ができる。無文部にかすかに見てとれるナデ調整の条痕はわずかながら異った方向で走行しており、貼付線文を貼り付ける度ごとにナデが行われたものと想定され、上位から下位へとという方向でなされたものと仮定されるが、逆方向でも可能ではある。また、間隔の開いた2条のなかへさらに付け加えられたものと想定できるものがあり、等間隔を保っていない74の資料などが知られる。93、95-97は条数が3条以上となるもので、全体として貼付線文は粗い調整で終わっている。95は口縁端部の内面に段をつけるもので、内面へ粘土を継ぎ足している状況が想定される。ともに内面への調整は粗い。99は外周から穿孔した補修穴2個が見られる。器表では6mm、内面では3mmをはかる。口縁内面では押圧痕のこり、調整は粗雑だ。100、102での貼付線文上には、列点状の圧痕が見られる。小型土器と認められるものとして106が上げられるのみで、口唇に面取りが施され、内外面ともに炭化物が付着している。104、105、107は尖り気味の口縁となるもので、104では口縁端部を丁寧にナデ調整が入られている。108、110の貼付線文は平行な位置ではなく、わずかながら曲線を描いているのが注意される。113、114、117、122は多条化した貼付線文で、114では7条までを数える事ができる。また、貼付線文の下半にへら先と想定される沈線文が列点状に引かれているのが注目される。113の口縁帯を横断する平行した沈線(竹管?)を見るが、意図的な施文となるのかは判断できない。口唇に平坦面をつける。115は太目の貼付線文が口縁端からつけられているもので、3条から4条目にかけての無文部の間隔が大きくあいているようだ。119は波状口縁の波頂部片で、波頂部口唇は粘土紐を貼付して小突起状をなしている。外周には煤が付着している。120の貼付線文上には列点が認められ、細別すべき資料とも考えられるが、上位にある貼付線文では明快ではなく、本類に留めておく。内面の調整は入念である。127は曲線を描く貼付線文で、上下を明確に判別できないのであるが、貼付線文へのナデ調整は上半部へ行われるのが通例である

ところからあえて図示している。128、130～133の資料は口縁部と胴部の境目の破片で、貼付線文上へのナデ調整が下半部にまでおよんでいる事を明快に示しているものと言える。

C (134～136)

口唇部分へ刻目、列点を加えているものをまとめた。

134は口唇部に斜行する刻みを施しているようだが、縄文を施文しているようにも受け取れる。口縁端部内面が若干肥厚している。135は口唇部に列点を持つもので、ヘラ先を使用しての施文であろう。貼付線文はさほど目立たず、下半部分への調整が顕著となっている。136は薄く尖り気味の口唇部に刻目文を入れ、さざ波状口縁としているもので、貼付線文はやはり形態化してい



第15図 縄文土器拓影(5) (137～177) (S = 1/3)

ると言える。

3類

粘土紐を貼付して調整を施すものではなく、器面調整の際にシワ状の微隆起をつくり出しているもの、および、無文と化しているものを3類とした。従来から言われてきた「ミミズバレ」状の微隆起線文土器で、1類、2類の貼付線文土器群とは用語使用上から厳密に区別すべきものと考えられる。

A (137~149)

137~139は外傾気味に立ち上がる口縁で、いずれも口唇部が平坦に調整されている。137では微隆起線文の間隔は12~13mmをはかり、等間隔に近いものと言える。137、138には外周に煤が付着している。器壁厚は5mm強をはかり、1、2類に比較して薄手のつくりと言える。なお、内面へのナデ調整は丁寧に施されている。141は微隆起線文で同心円状の文様をつくり出しているものであるが、等間隔にはそろえられてはいない。内外面に炭化物が薄く付着している。140、142~145の資料は、口縁端部を欠いている文様帯の破片である。微隆起線文の間隔は、142で11mmをはかるが、他は不明。143では17mmの粘土紐輪積痕を観察する事ができるが、破片の上下が判然としないため、内積み、外積みにはわからず断定できない。いずれも、外周の色調は暗褐色を呈し、器表面に微砂粒が見られるものの、内面は入念に調整され砂粒は目立たない。

146~149は胴部に施文された縄文が見られるものであるが、148は2類に含むべきかもしれない。146、149の微隆起線文の間隔はともに11mmをはかり、胴部縄文の器壁に比べて、わずかながら器厚が増すように見られるところから、薄く粘土を足してナデ調整を行っているものと判断される。170の資料においても同様の観察ができる。

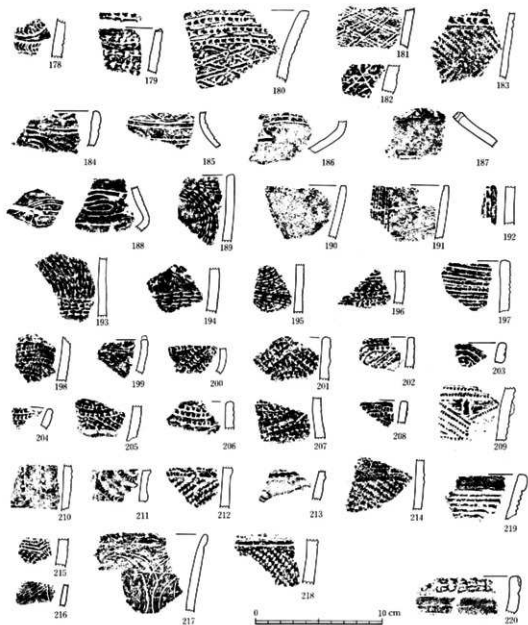
B (150~171)

微隆起線文も見られない無文のものでBとした。口唇部はAとともに平坦にナデ調整が加えられているのが通例で、166の内屈気味の口縁例を除いて外傾する口縁部を持つものが目立つ。器壁の厚さは5~8mmの幅があるが、5mm強の薄手のものが多いのはAと同様である。内外面とも丁寧なナデ調整が行われている例が多い。

150~152の3点は波状口縁の波頂部片と推定されるもので、150ではナデ調整の痕跡が曲線を描いているのが観察できる。胎土に微砂粒を混和させているが良好と見られ、焼成も良。151の表面には煤が付着している。

153~164までは平口縁と想定され、外傾気味に立ち上がるもので、いずれも薄手のつくりとなっている。内面の調整は丁寧にナデを入れているものが多く、平滑になっているものも見られる。153の内面の口縁端近くには比較的厚い炭化物が付着している。また、かすかではあるが、内面に粘土紐輪積み痕が16~18mmの間隔をおいているのが見られる。157の口縁端部には継ぎ足された痕跡が器表面に認められる。その幅は約5mm程をはかる。164は縄文地文の痕が薄く遺存しているようだ。

165は口唇部分が尖り気味のもので、小型土器と想定される。胎土は精選され、焼成は堅緻。
 167～171は比較的厚手のつくりで、器壁は7～8mmの厚さを測る。167は外反して立ち上がる
 口縁部で、口唇部はやはり平坦面を形成している。169では大きく外反して立ち上がる口縁部が想
 定されるもので、器表面に粘土紐輪積みの痕跡が約10mmの間隔をおいているのが観察される。
 170、171の胴部に縄文が施文されているが、口縁部のナデ調整に先行して施されていると見られ



第16図 縄文土器拓影(6) (178～220) (S = 1/3)

る。168、169では器表面に煤が付着している。

C (172)

無文地に断面三角形の貼付線文がつけられるもので、1例の出土である。2類に含めて考えるべきかもしれないが、無文地であるところから、仮に位置づけた。172は比較的小型になると思われるもので、無文とした後に貼付線文をつけている。外周には煤が付着し、胎土には微砂粒が多く混和されている。

4類

4類土器としたものは貼付線文土器で、2類Aとしたものとの類縁性が強いものと言える。貼付線文は比較的幅広で太く（突帯文）、貼付線上に施される施文具によって細別した。

A (173~176)

173~175は同一個体のもつと見られるもので、色調は茶褐色を呈し、胎土に砂粒が目立つ。貼付線文の間隔は比較的狭く、へら状工具による刻みが上が左下り、下が右下りの状態で引かれ、口唇部から垂下する貼付線と鍵状に結びつく。若干肥厚した口唇部分には、へら状工具による斜格子目状文が施文されている。貼付線文へのナデ調整は上半部分では比較的顕著に施されているが、2条目以下では胴部の縄文地文を見てとる事ができる。175には器表面の一方方向からなされた補修穴が見られる。176は褐色を呈するもので、矢羽根状沈線と貼付の状況から2条目のものと判断される。

B (177)

1例のみの出土である。口唇は平坦にならされ、貼付線上にLRの斜縄文が施文されている。色調は茶褐色を呈し、胎土に砂粒が混和されている。

第2群土器

時期的な幅は広くなるのであるが、貼付線文土器、縄文土器を除いたもので第2群とした。前期後半を主体とし、一点のみであるが中期後葉のものを含めた。以下、各類は施文手法の違いによって分類している。

1類 (178)

1点だけの出土である。長さ8mmの比較的大きな爪形文を密に施文し、全体としては弧状の文様をなすように受けとれる。褐色を呈し、胎土に砂粒は少く、焼成は良。内面のナデ調整は丁寧である。

2類 (179)

1点だけの出土である。器表面に粗雑なナデ調整の後、先端の尖りが弱い竹管状工具で、3段にわたって間の開いた爪形文を施文している。口唇部内側端部に同一工具で刺突を加え、中央部分に沈線を引く。内面から口唇を見ると小波状を呈している。器表面に炭化物が付着している。

3類 (180~183)

竹管文で斜格子状の文様を引き、交叉する点に円形の刺突を加えるもので、3例の出土である。180は口唇に剝離痕が見られ、突起がつけられていたようだ。口縁に平行して3条の爪形文が引かれ、爪形文間には押引文が加えられている。縄文地に斜行する竹管文を右から左へ、上から下への順序で施文する。器壁は約7mmと比較的厚手のつくりで、暗褐色を呈し、胎土に砂粒が目立つ。181は竹管幅が3mmと狭いもので、斜格子目の交叉する点への刺突は円形ではなく、同一工具による爪形文を呈している。胎土は前者と同様に砂粒が目立つ。内面の調整は丁寧である。182は精選された胎土で砂粒は極めて少量である。竹管幅は5mmをはかる。色調は淡褐色を呈し、焼成は良好である。183の爪形文を入れる平行沈線文は、爪形文と同時に引かれたものではなく、先行してつけられたものである。胴部に施文する縄文は、条の端部を他の細縄でとめているタイプで、本遺跡では唯一の例であった。

4類 (184~188)

浅鉢器形を呈するものをまとめた。184、185は同一個体で、淡黄褐色を呈し、胎土に粗砂粒をかんでいるが、全体として見ると均一な状態となっている。口縁は直立させて図示しているが、大きく内傾する可能性がある。口唇は平坦面を有し、口縁直下にかすかに隆帯をめぐらせ、以下、竹管文を平行に引きめぐらす。口縁帯には曲線的に施文され、185の頸部では平行線文を入れて口縁文様帯を区画しているようだ。186は胴部下半の破片と見られるもので、突出部分に竹管文が引かれている。前者2点と同一個体かと考えられるが、判然とはしない。187の傾きについてはかなり不安を感じるもので、内外面とも入念なナデ調整が加えられている。頸部に径3mmの2個の穿孔が施されている。色調は淡赤褐色を呈し、胎土に粗砂粒が多く混和している。188は浅鉢胴部の突出部分と見られるもので、施文手法は184、185の個体に類似している。外周部分へのナデ調整は丁寧であり平滑な面をつくり出している。胎土は精選され良好である。

5類 (189~196)

結節沈線文を施文するタイプを5類とした。190、191は平坦にナデる口唇を持ち、器表は丁寧なナデ調整が加えられた後に施文がなされている。190では垂下し、189では曲線的に引かれている。191の沈線文の幅は、2.5mmと極めて狭い工具が使用されている。色調は褐色を呈し、焼成は良好。器表の横ナデ調整痕が右方向に上昇しているのが注意される。192では結節沈線文の深さは約3mmで、器厚の約半分にまで切り込んでいる。189、193は同じ文様構成をとるもので、193は器形、上下は判然とはしないものであるが、結節の引きははじめが左にくるように配した。器表面は著しく磨耗している。189の色調は淡黄褐色を呈し、胎土は精良である。195についても上下に不安はこのころが、図示した形で記述すると、横方向の沈線文の後に斜め方向の沈線文が引かれている。196では煤の付着を見る。結節沈線文間にLRの縄文地文が見てとれる。

6類 (197~200)

細身の竹管で爪形文を連続させるもので6類とした。197は波状口縁をなすものと考えられる口

縁部で、幅4mmの竹管文6条を近接させて施文している。器厚は8mmをはかり比較的厚めの部類に含まれる。199は口唇に小突起をつける小型土器と判断できるもので、口縁と平行する竹管文の幅は2.5mmと狭いものである。かすかではあるが、曲線的な竹管文がうかがえる。

7類 (201~207)

結節沈線文を引くのであるが、竹管を片側に傾けて引くために沈線は1条だけが際立って見える。口縁部片で見ると上下2条の沈線の下側が、器面に深く喰い込む形となるのが通例で、片流れ結節沈線文と呼称してゆく。201~203、206の4点の口縁部片は、いずれも波状口縁を呈するものと想定される。201ははっきりとした波頂部片で、口縁に沿う3条の片流れ結節沈線文が左から右という順序で引かれ、波頂部下には曲線的な施文がなされるようだ。色調は濁褐色を呈し、胎土には微砂粒が目立つ。202では口唇部が平坦に調整される。灰褐色を呈し、胎土は精選されている。207は無文部の位置にわずかのくびれが見られ、屈曲する胴部を持つようだ。内面の調整は入念で平滑な面を持っている。

8類 (208~214)

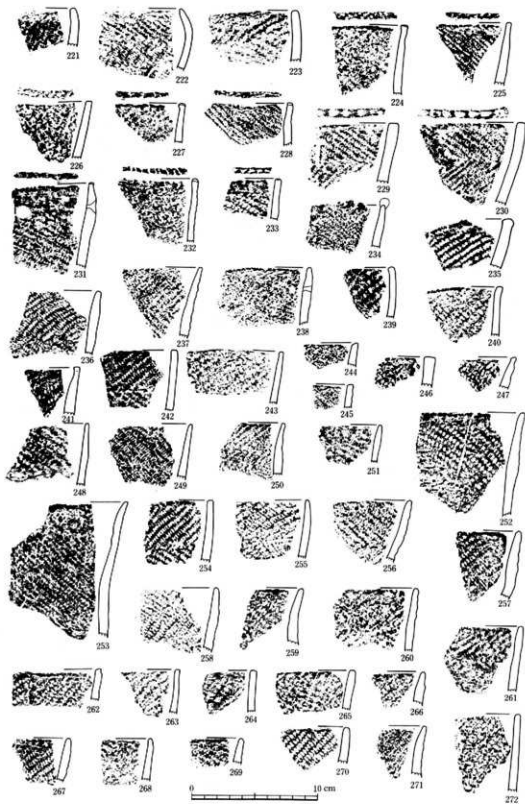
結節浮線文を持つもので8類としたが、厳密に観察すると本類に含まれたものはさらに細分されそうである。208は口唇を平坦にする口縁部片で、浮線文の盛り上がりは弱い。淡黄褐色を呈し、胎土は精選されている。209は器面に突起を貼付しているもので、長径12mm、短径6mm、高さ3.5mmをはかる。結節浮線文は均一な太さと高さを持ち、入念な施文である。竹管幅は3mmを測る。内面のナデ調整も丁寧である。色調は淡褐色を呈し、胎土に微粒砂を混じえているが、器表面では目立たない。210は縦方向に置かれた結節浮線文で、無文地上の浮線に間隔をおいて列点状に引きおろされている。煤が付着。211の浮線文は周辺にナデ調整が入れられた後に竹管文を施文するもので、前2点とは異なる文様手法をとる。212は文様帯と胴部縄文部の境で1条の浮線文をめぐらし、文様帯は蛇行する浮線文がおかれている。214もほぼ相似した構成を持つようだ。ともに、器表面の磨耗が目立つ。213は判然とはしないが、浮線と竹管の幅、高さが不揃いとなるもので、211と似た施文と言える。

9類 (215~217)

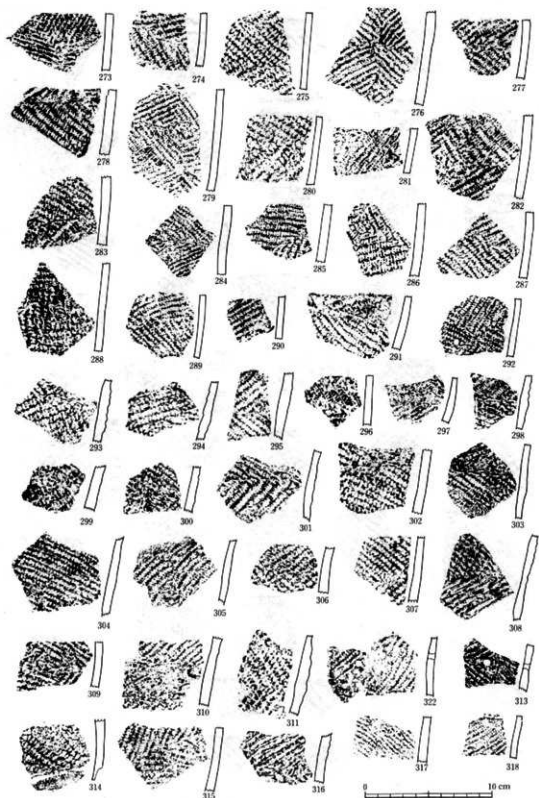
1~8類に含められないもので9類とした。215、216は細身の竹管文を使うもので、後者は器厚が4mmを測り、薄手の小型品と想定される。217は小型の鉢器形と見られ、外傾して立ち上がる口縁の端部をわずかに外展させる。外展する部分には新たに粘土紐を継ぎ足しているようだ。胴部にはへら状工具による弧線文を粗雑に引きめぐらす。褐色を呈し、胎土には微砂粒が含まれている。器表面のナデ調整は粗い。

10類 (218、219)

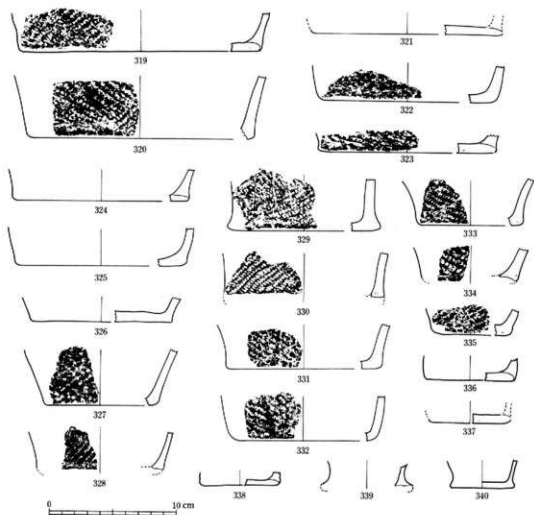
細身の半隆起線文をつけるもので、219の口縁部の無文部は、粘土をはり足してつくるもので、半隆起線文の部分より器壁が厚く盛り上がっている。竹管幅は約4mmを測る。色調は濁黄褐色を呈し、胎土に砂粒は少ないが緻密さに欠ける。



第17回 縄文土器拓影(7) (221~272) (S = 1/3)



第18図 縄文土器拓影(8) (273-318) (S = 1/3)



第19図 底部拓影 (319-340) (S=1/3)

11類 (220)

櫛状具刺突文をつける中期後半の土器と考えられる。半隆起線文の幅も広く、色調は明るい褐色を呈している。11、12グリッドから出土した。

第3群土器

縄文施文のみの深鉢、縄文施文の胴部片、底部で第3群土器とした。

1類 (221-223)

口縁端部で内屈気味におさめるもので3例の出土であった。222、223は羽状になるように縄文が施文されている。222の口唇部分は尖り気味につくり出しているが、内側から粘土紐を足してい

るもので、器表面は横ナデ調整が加えられている。胎土に粗砂粒が混じる。

2類 (224~227)

2類以下に含めたものは外傾ないしは、直立気味に立ち上がる口縁を持つもので、2類は口唇部に縄文を施文するものでまとめた。225は口唇部近くで器壁が薄くなり、小さく外傾するもので、体部にLRの斜縄文を施文した後に、口唇部に加飾する。226も同じ手法をとるようだ。227は波状口縁になるものと想定される。口唇部へ粘土を継ぎたしてつくり出すもので、口縁内面にはみ出したものにナデ調整を施しているのが見られる。口唇に凹凸が目立つ。

3類 (228~230)

口唇部に列点状の押圧を施すもの。229、230は同一個体片で、羽状縄文が施文されている。口唇上には、口唇幅に近い工具で押圧がなされている。押圧のために口唇部内角が若干の肥厚を見せている。色調は暗褐色を呈し、胎土に微砂粒が多く見られる。内面のナデ調整は横方向になされ、輪積み痕の凹凸が明快に読みとれる。外周には煤が付着している。

4類 (232)

口唇に刃先の鋭い工具で斜め方向に刻みを入れるもので、1例の出土である。刻みは口縁内側からもしっかりと見られ、口縁を切り込んでいるとも言える。

5類 (231、233)

口唇に列点を置き、口縁端部に一定の幅を持ってナデ調整を加え縄文地文を消してしまうもので、大型、小型品と見られる2例の出土があった。231は口唇部分が尖り気味となり、口縁端部に粘土をつぎたしている痕跡を見る事ができる。ナデ調整の入れられる幅は約1.5cmを測る。内面への調整はやや粗雑である。233は口縁端部約1cmにナデ調整が入れられるもので、縄文部との境界に微隆起線を見る。口唇は竹管状工具の背を下にして押しきしたものと観察される。胎土は精良で焼成も良好である。

6類 (234、235)

234は2個1対の突起をつけるもので、口唇に粘土紐を向い合わせにするかたちで貼り付けている。それぞれはやや斜め位置である。235は波頂部に小突起を付して小三角形にするもの。

7類 (236~247)

口唇にナデ調整が施され平坦になっているものをまとめた。237は口唇にむけて器壁の薄くなるもので、口縁端に若干のナデ調整痕が見られる。236、237、242の縄文施文は丁寧で羽状形を呈している。236、242、245の器表面には煤が付着している。

8類 (248~251)

口唇に向けて器壁が薄くなり尖り気味となるものをまとめた。248の色調は橙褐色を呈し、胎土は精選され緻密で、本群のなかでは異質の色調、胎土を持っている。250は口縁端が小さく外展するもので、胎土には多量の砂粒が含まれている。

9類 (252~252)

口唇部を丸くおさめるタイプのもので9類とした。8類をも含めて考えるべきかもしれない。253は外傾気味に立ち上がる口縁を持つもので、外周には煤が付着している。縄文はRLの斜縄文が施文されている。内面は磨耗がすすみ砂粒が多量に浮いている。焼成はやや良くない。254、256、264、267、268の口縁端は縄文施文後のナデ調整が見られ、口唇部調整が最終段階である事をうかがわせる。262は小波状口縁となる可能性が見られる。

10類 (273~318)

胴部片で縄文施文のものをまとめて10類とした。第1・2群土器の胴部片をも含んでいよう。胴部片であるために、土器の上下が判然としないものが大部分であり、図示したものの器壁の厚さを参考にできる程度である事をお断りしておきたい。色調は茶褐色から暗褐色までの幅があり、胎土は精選されて砂粒の少ないものが多い。内面へは横ナデ調整が入られ、入念に施されたものが目立つ。294は内面に粘土紐の輪積み痕を遺存しているもので、段の間隔は8~12mmを測る。303は内面調整の精粗がはっきりと区別できるもので、体部と口縁の境にあたるのであろう。305は縄文の上にナデ調整が見られるもので、文様帯(貼付線文土器)に近い位置にあたるものと想定される。314は輪積み部分から剝離したものと想定され、剝落部分は比較的平滑となっている。316は無節の縄文が施文されているもの。補修穴を持つものは292、312、313の3点で、器表面から穿孔し、内面で向え穿ちをなしているのが通例である。

底部 (319~340)

底部片は107例までを数えたが、実数は大きく減少するだろう。底部の形態は単純なもので、平底を呈するものが大部分で、小型品の1例に凹底を持つと推定されるものが見られる程度である。底部は丁寧にナデ調整を入れているものが大半であり、敷物を想定されるものはない。底部は円盤状に剝離しているものが目立ち、別個に作製された底部で、胴部に蓋をするという状況が推定できる。

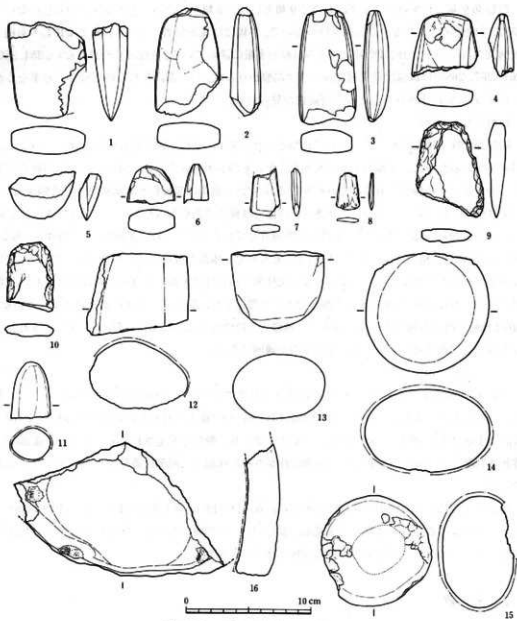
底部の径で見ると大中小の3型態が考えられる。14~19cmの大型品(319~323)、10~14cmの中型品(324~332)、10cm以下の小型品(333~340)の3種であるが、任意の数値での分類は危険であり、今後は全体器形をとおして分類を行うべきであろう。

2 石器

磨製石斧 (第20図1~8)

8点の出土があるが完形を保っているものはない。石斧の身幅から見ると大型のものは2種に分けられる。

1は大型品で、刃部の一部と頭部を欠損している。定角式のもので、表面での磨面は角がとられ平滑となり入念な仕上げである。表面での磨面は斜め方向の小さな擦痕が多数見られる。刃部は比較的鋭利に造り出され、使用による擦痕が斜め方向に見る事ができる。身幅は6cmを測る。



第20図 石器実測図(1) (S = 1/3)

2～6は中型品として考えたもので、刃部と頭部がわずかながら体部より幅が小さくなるタイプと見られる。体部の幅は約5cm、厚さ1.5～2.1cmを測る。2は刃部を欠くもので、頭部が尖り気味に調整されている。3は刃部を欠いているものの、全体形を想定しうるもので、長さは約10cm以下と推定される。体部は中央部分が厚く、側縁部分が薄くつくりられている。また、側縁は角が立たず、全体に丸味をつけるようにして仕上げている。体部の磨きは一定の方向にされた面

と、小さな面を持ち大きく角度を変えて造り上げている面の2面が認められる。4は頭部片。5は刃部片で、丸刃をつく出している。使用による擦痕は肉眼ではほとんど見られず、あまり使用しないうちに欠損したものと推定される。6は頭部片で、幅が3.6cmとやや中型品としては小振りであり小型品に含むべきかもしれない。頭部を尖り気味にしているのが注目される。

7・8は小磨製石斧で、頭部から刃部にかけて幅をひろげた撥状を呈している。7は頭部と刃部の一部を欠いている。8は頭部の両側縁を欠いているだけで、ほぼ完形品と言える。

打製石斧（第20図9・10）

2例の出土があった。石材とともに輝石安山岩質のもので、刃部を欠いている。2例の表裏面には剝離面と考えられる面が見られ、板状に欠いた石材を利用しているものである。9は刃部に向けて幅を広げる撥形で、10は短冊状になるものと考えられる。

磨石類（第20図11～15）

使用痕と見られるものを持つものは5例が得られた。11は楕円形をなすものと見られる一部で、平滑になっているのが認められるが、一定の面を形成するものではなく、円柱全体として使用されたのであろう。12は楕円形の石材の中央部分のみの遺存で、また、背面が剝落している。図示した部分が平滑になっている。13は両面に雨垂れ状のくぼみを持つもので、側縁にも使用による一定の面が形成されている。14は楕円形を呈する石材で、約5分の1程を欠損している。側縁を除いて全体が平滑になっている。凹石としての使用痕は認められない。15は約4分の1を欠損している。円形を呈する平面は平滑になり、側縁および円形の中央部分は一定の面をつくり、ざらついている。

石皿（第20図16）

石皿と考えたものは1例だけである。全体形を想定するに足りないのであるが、平面形は楕円形をなすものと見られよう。表面が小さく湾曲していることから、石材は当初から若干のくぼみを持つものであったと想定される。

石鏃（第21図17～40）

24例を図示しているが、その他に形が歪つだったり失敗作と見られるものが15例以上を数える。平面形状と大小によって6類に分類した。石材は輝石安山岩およびフリントで占められる。

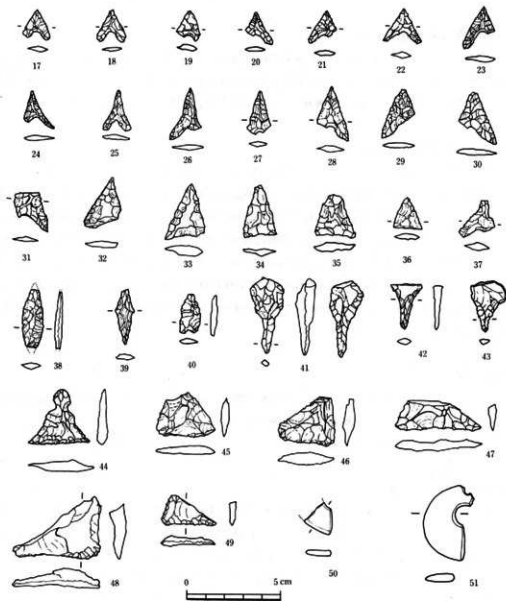
1類(17～21) 正三角形に近い形をとり、わたくりが深くつくられているもの。全長が1.6～1.8cmと小さく、それだけ精巧につくり出されている。21の石材は黒曜石質である。

2類(22～24) 1類と同様の形状をとるが、大きさが1.8～2.2cmを測るもので、わたくりが大きくて深くつくられている。

3類 (25~27) 刃部と基部がしばられた形で伸ばすもので、杉島孝博氏が三ツ矢形として縄文時代前期石鏃の特徴として指摘されているものである。全長が2.2~2.8 cmを測る。

4類 (28~31) 二辺が長くなった三角形を呈するもので、わたくりがつくられる。全長が2.7 cmを越えて大型となっている。

5類 (32~36) 4類と同じ平面形をなすのであるが、わたくりがなく平基となっているもの



第21図 石器実測図(2) (S = 1/2)

で5類とした。その細部調整は1～4類に比較して粗雑となっている点が指摘される。

6類(37～40) 1～5類に含めえないもので6類とした。37はスクレーパーに、39は石錐とも考えられるものである。38は尖頭器で、両端部を欠損しているが、入念に調整された資料である。

石錐(41～43)

4例の出土があった。41は完形品と見られるもので、厚くなった基部から両側縁を調整して、断面が菱形を呈する舌状部をつくり出してゆく。42、43は扁平な石材からつくり出されている。

石匙(44～49)

完形品としては44の1例だけである。その他はつまみの部分を欠損しているものと考えたものであるが、48、49は剥片に刃部をつくり出したものであるかもしれない。

球状耳飾(50、51)

2例の出土があった。50は復元された深鉢(30)と相伴して出土している。石材は同質のものと見られ、全体が濁乳白色を呈し、ブロック状の濃緑色が一部に見られる。濁乳白色の部位には、擦痕の線上に光を反射する状況をなし、すかすとはんやりと透ける。珪酸質の岩石で、緑泥岩か緑連石かの判別は困難である。51の孔径は1.1cmをはかる。背面は平坦に近く磨かれ、表面は孔のあく位置が最も厚くつくりられ、端部にむけてゆるく曲線を描いて器厚を減じてゆく。孔の上位には補修孔があげられているが、孔と同じように背面からの穿孔がうかがわれ、表面からはそれを向かえうがったものと想定される。切目の長さは約1.8cmをはかり、全体形としては円形に近いかたちが想定される。切目の部位で見ても孔のある部位から端部にむかってカーブをとって厚みを落としている。表裏面ともに入念に磨かれ、特に縁部は光沢を発するように調整されている。50は小振りのもので、切目部分のものと推定している。平板に仕上げられており、51に比較して磨きはより丁寧になされている。

表1 石器一覧表(単位: cm・g)

遺物番号	名称	石質	長	幅	厚	重	出土地点	遺物番号	名称	石質	長	幅	厚	重	出土地点
1	磨製石斧	蛇紋岩	7.53	5.84	2.31	168	2 G	11	磨石	雲朽安山岩	4.47	3.19	2.53	56.5	2 G
2	"	蛇紋岩	8.79	5.43	2.39	184	4 G	12	"	輝石安山岩	6.4	8.1	5.4	440	2 G
3	"	ろう石系?	8.76	4.21	2.08	156	3 G	13	"	凝灰岩	5.8	7.3	5.1	348	表探
4	"	緑色凝灰岩	5.06	5.13	1.96	67.54	2 G	14	"	石英安山岩	9.6	9.8	6.6	736	2 G
5	"	緑色凝灰岩	3.32	4.72	1.41	22.57	3 G	15	"	輝石安山岩	8.7	8.8	5.6	556	3 G
6	"	片麻岩	2.95	3.64	1.94	23.77	2 G	16	石皿	輝石安山岩	17.5	10.6	2.7	614	3 G
7	"	蛇紋岩	4.67	2.41	0.69	9.95	3 G	17	石錐	輝石安山岩	1.66	1.51	0.24	0.41	表探
8	"	蛇紋岩	2.95	1.93	0.44	3.90	3 G	18	"	"	1.80	1.59	0.26	0.42	1 G
9	打製石斧	輝石安山岩	7.67	5.12	1.09	40	3 G	19	"	"	1.57	1.28	0.20	0.41	3 G
10	"	輝石安山岩	5.5	3.7	1.0	34	表探	20	"	フリント	1.85	1.12	0.24	0.35	4 G

遺物番号	名称	石質	長	幅	厚	重	出土地点	遺物番号	名称	石質	長	幅	厚	重	出土地点
21	石 鏃	黒曜石	1.84	1.11	0.29	0.44	2 G	37	石 鏃	輝石安山岩	2.33	1.41	0.49	1.02	4 G
22	"	輝石安山岩	1.98	1.97	0.32	0.58	2 G	38	"	フリント	3.00	1.21	0.41	1.15	3 G
23	"	"	2.13	1.32	0.28	0.6	3 G	39	"	輝石安山岩	2.89	1.02	0.35	0.79	表探
24	"	"	1.89	1.15	0.27	0.5	3 G	40	"	フリント	2.13	1.17	0.34	0.83	表探
25	"	"	2.11	1.57	0.29	0.9	3 G	41	石 鏃	フリント	3.92	1.88	0.88	4.40	2 G
26	"	"	2.81	1.75	0.32	0.4	1 G	42	"	輝石安山岩	2.31	1.54	0.53	1.14	2 G
27	"	"	2.28	1.27	0.22	0.41	3 G	43	"	"	1.82	2.58	0.48	1.91	3 G
28	"	"	2.95	1.41	0.39	0.95	3 G	44	石 鏃	"	2.77	3.22	0.58	3.15	3 G
29	"	"	2.43	1.38	0.28	0.45	3 G	45	"	"	2.18	3.02	0.42	3.19	2 G
30	"	"	2.76	1.66	0.32	0.63	表探	46	"	"	2.28	2.99	0.59	4.35	表探
31	"	"	2.10	1.44	0.23	0.72	1 G	47	"	"	1.53	4.42	0.43	3.48	3 G
32	"	"	2.64	1.58	0.39	1.22	2 G	48	"	フリント	3.37	4.60	0.85	8.86	2 G
33	"	"	2.82	2.08	0.57	2.05	表探	49	"	フリント	1.68	2.86	0.49	1.63	4 G
34	"	"	2.72	1.95	0.55	1.81	3 G	50	決状耳飾	緑泥岩?	1.65	1.49	0.31	1.20	2 G
35	"	フリント	2.15	2.18	0.39	1.14	3 G	51	"	"	3.97	2.21	0.62	8.57	4 G
36	"	輝石安山岩	1.60	1.48	0.31	0.66	2 G								

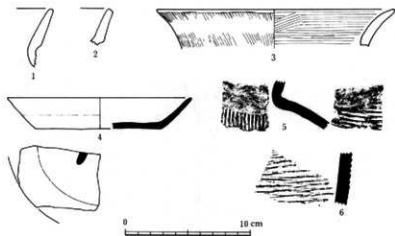
3 土師器、須恵器

土師器は2、5 Gの上層部および工事中の排土中から10点近い出土を見たが、小片のために図示したのはごく一部にしかすぎない。高坏、甕等が見られた。1、2はともに赤彩が施された口縁部片で、小型壺ではないかと考えられる。月影期に併行するものであろう。

3は南端部分のHグリッドから検出されたもので、体部片も存したのであるが接合復元はできなかった。口径18.8 cmをはかる。色調は赤褐色を呈し、胎土には砂粒が目立つ。外周は縦方向、内面は体部を含めて横方向の刷毛調整が行われている。

4は1号土壇の覆土中から検出した須恵器坏である。口径14.6 cm、器高2.5 cmをはかり、約4分の1の破片である。底部外面には墨書が認められるが判読はできない。

5は須恵器壺の頸部片、6は珠洲焼である。



第22図 須恵器、土師器実測図 (S=1/3)

V ま と め



「縄文前期の土器型式について」

三井新保遺跡は、縄文時代前期後葉、中期後葉、古墳時代初頭、平安時代、中世の遺物を包含する複合遺跡であった。穴水町から輪島市へぬける交通路の要所に位置している事から、調査が進展すれば、前記に記した各時代をつなぐ遺跡が複合していると考えても大過ないであろう。

本遺跡調査での主体的な遺物は縄文時代前期の資料である。近年までは表採資料に近いかたちで進められてきた前期後半の研究は、発掘調査事例の増加とあいまって各時期の内容を深め、再構成をうながしているのが、現在の北陸の状況であろう^(註1)。そこで、本遺跡のかかわる前期後葉の研究史を略述し、幾つかの問題点を整理し、まとめとしたい。

北陸地方における前期中・後葉の編年体系が固まったのは、1955年の九学会編『能登』^(註2)にまとめられた報文であろう。富来町福浦ヘラソ遺跡の資料を基にして、下層の福浦1式は器厚が3mmと薄く、爪形文を連続、連続状に施文し、胴下半に羽状縄文が施文される。下層の福浦2式は諸磯式類似の施文を持つもの、低い隆起線上に爪形文を施文するもの(結節浮線文?)をさし、上層出土の福浦3式は十三菩提式類似のもの、細ミズ張の隆起線文をつけるもの、ソーメン状の粘土紐を貼付するもの、口縁を無文にして胴部に羽状縄文をつけるものの4種類があると論じ、関東、関西地方の編年体系に近づけたかたちで組み上げている、資料の絶対的不足から北陸独自の地域性の把握にまではとどいていない。

同年、蛭森貝塚は福浦2式の貝塚であるとしている。^(註3)

その後、1965年に高畑勝喜氏は「福浦1～3式」を廃し、福浦下層、上層式にまとめた。^(註4)前者は北白川下層II式に酷似し、後者は鍋屋町式に親縁性が見い出せるとし、先の福浦1～3式の内容をとらえなおしている。

同年、北白川下層I式に併行する朝日C式、II式には福浦下層式をあて、みみずばれ状の微隆起線文を蛭ヶ森式、鋸歯状印刻文を福浦上層式にあてる編年案を提出している。^(註5)分布圏との関連では、朝日C式には黒浜式類似の土器がわずかに含まれ、福浦下層式には諸磯式土器が微量に混じる程度であるとし、東日本の影響は薄いと結論づけている。一転して、福浦上層式では新潟、長野地域との関連が濃厚となり十三菩提式との類縁も考えられるとし、後続する朝日下層式、新保式の東日本への傾斜の高まりを説いている。福浦上層式に先行するとした蛭ヶ森式期において、北陸は西日本の土器文化から東日本の縄文土器文化への転換をなしたものと理解される。

1968年には、沼田啓太郎氏が金沢市小野町縄文遺跡の略報を発表している^(註6)。貼付線文と羽状縄文で成る単純な器種のみで、「小野式土器(仮称)」を設定しようとし、単純と見られていた「蛭ヶ森式」への検討を提起している。

同年、小島俊彰氏は論文「北陸における縄文前期末の様相」を発表している^(註7)。簡潔にまとめられた研究史と現状や型式の認定と他地域との比較、土器分布圏と中期文化の北陸圏の位置づけ等は、型式の設定から北陸の地域性の止揚としてまとめ上げられ、現在の北陸縄文研究の展望をひらいたものとして高く評価される。そのなかで、小島俊彰氏は蛭ヶ森式土器は明確に内容をつかみ得るとし、単純遺跡が多い点を指摘している。先行する朝日C式、福浦下層式はイメージとしてはあるが、型式内容が意外にも明瞭ではないと素直に述べられている。現在においても状況はあまり変化しているとは言えない。小島氏は不鮮明な状況とは、資料の少ない点とともに北陸独自のものがつかみ得ないのは、東・西日本のものがそのままの形で存在しているためであるとしている。そのなかで蛭ヶ森式は、やや大きめの底部に屈曲のない胴部がつく単純な器形で、口辺に無文帯が置かれたり、微隆起線文が引かれ、胴部一面に羽状縄文が施文される。そして、微隆起線と太い隆起線を引くものとの差異が遺跡によって見られるとし、沼田氏提示の時期差は今後の検討課題としている。

1972年、橋本正氏は「縄文時代前期の問題」^(註8)のなかで、範型と様式という枠組を設定し、各型式の細別を試みられている。蛭ヶ森式の古い部分は諸磯B式に、新しい部分は諸磯C式に比定されると暫定的と断りながらも細分される可能性を指摘している。

1974年、石川県において縄文前期研究の出発点となった福浦ヘラソ遺跡の報文が杉島孝博氏^(註9)によってまとめられた。福浦下層式は北白川下層IIb式に類似するとの指摘を行っている。福浦上層式には微隆起線文土器を含めて、蛭ヶ森式とは手法が異なっているとしているが、包括すべきものと思われる。その他では、結節沈線文、結節浮線文(浮隆爪形文)、鋸歯状印刻文を上げている。

1978年、安田古宮遺跡の報告があり^(註10)、小島俊彰氏は福浦上層式の位置づけで鍋屋町式土器を通して東日本全域にわたっての対比を行い、福浦上層式が前期的な様相をとどめたものとして再確認を行っている。

1981年には、先年調査を実施した福浦ヘラソ遺跡の成果をまとめて、越坂一也氏^(註11)が発表している。その調査状況のなかで、蛭ヶ森式土器の特徴である微隆起線文の太いものと細いものを層位的に確認することができたとして、蛭ヶ森式の細分案を提案している。しかし、微隆起線文の太さを、資料をとおして観察していくうえでは、いまだ迷途せざるを得ないように思われる。

富山県大門町小泉遺跡の報告は、1982年に刊行された^(註12)。そのなかで、高橋修宏氏は前期後・末葉土器編年の再考を記述され、越坂氏の提起を受けて微隆起線文を3類に分ける基準を示している。太い粘土紐を貼りつける隆起線文(A₁型)、断面三角形を呈する微隆起線文(A₂型)、シワ状となった微隆起線文(A₃型)の細分案で、結節沈線文、結節浮線文土器、鋸歯状印刻文土器とのかかわりを包括して蛭ヶ森I、同II、福浦上層I、同II式の4型式を提示している。北陸における各遺跡の出土状況を細かく検討したもので、各型式の内容も一段と鮮明になったものと思われる。北陸の編年大綱として妥当なものであり、筆者も賛意を表しておきたい。

以下、既述した研究史の成果を受けて、三井新保遺跡出土器の位置づけを試みてゆく。

第1群土器は微隆起線文をつける土器で、高橋修宏氏、越坂一也氏とは若干視点を変えた基準で分類を行っている。深鉢器形としては単純なバケツ状器形をとるもので、ほとんどが平口縁をとるものと理解される。1類としたものは、縄文地文の口縁帯に太目の粘土紐を貼付するものでその平行する粘土紐の間隔が開き気味で、2～3条程度にとどめられている。高橋修宏氏のいうA₁型で、断面三角形をなす(A₂型)をも含めて平行線の間に縄文地文が見られるものについて、貼付線文土器とした。金沢市小野遺跡^(註13)、富山市小竹貝塚^(註14)でその類例を見る事ができる。この粘土紐を貼付するという手法に加えられる調整とそれによって引き起こされる変化を無文化と微隆起線文の多条化として方向性を仮定すると、A₁→A₂→A₃型の流れを容易にとらえられる。すなわち、貼付線状が間隔のあいた2条程度で粘土紐そのままのもので断面が円形のもの(1類B)、貼付線文に押圧を加えたもので断面が三角形を呈するもの(1類C)、貼付線文の上半部分にナデ調整が加えられるもので、断面が偏平な三角形となるもの(1類D)の細分で、縄文地

文を見る事ができるものである。2類は縄文地文が見られず、貼付線文の上半部に横ナデ調整が加えられ断面が偏平な三角形となるもの(2類A)、貼付線文の上下ともにナデ調整が加えられ、条数が4~6条と増加し、間隔が狭くなっているもの(2類B)に細分される。3類は調整工具によって微隆起線がつくり出されるもの、無文となるものに分類した(3類A・B)。これらは時間的な差を直接的に指し示すものではないが、1類B→1類C→1類D→2類A→2類B→3類A→3類Bの7つの細分類が変化の流れとしてつかみ得る事は可能であろう。そのなかでの画期は1類B、2類B、3類Aとして取り上げられ、高橋氏のA₁~A₃型に対応するものである。しかし、その画期に含め得ない中間型式を含めて考えるならば、1~3類でもって細分するのが妥当と考える。

1類土器を出土する遺跡はそれ程多くはない。金沢市小野町遺跡、富山県小竹貝塚⁽¹⁵⁾、同県吉峰遺跡⁽¹⁶⁾、同県規ヶ森貝塚で知られるが、2、3類土器を含むかたちでの出土である。そのなかで、単純遺跡に近い金沢小野町遺跡の在り方は注目して考えてゆきたい。

2類土器を出土する遺跡は石川県では富来町福浦ヘラソ遺跡、富来町酒見サンノハザマ遺跡⁽¹⁷⁾、七尾市新保A遺跡⁽¹⁸⁾、富山県では1類土器を出土している上記遺跡の他に閉山遺跡⁽¹⁹⁾が上げられる。新潟県鍋屋町遺跡⁽²⁰⁾では第2群土器4類としての出土が見られ、諸磯C式土器との同伴関係を持つとの指摘があるが、小島俊彰氏⁽²¹⁾は貼付する隆線文手法から諸磯B式、北白川下層Ⅲ式との関連を提起している。

3類土器(所謂みみずばれ状隆線・微隆起線文、無文)を出土する遺跡は数多く知られている。酒見サンノハザマ遺跡、福浦ヘラソ遺跡、新保A遺跡、金沢市中戸遺跡⁽²²⁾があり、富山県でも規ヶ森貝塚、小竹貝塚、安田古宮遺跡があげられる。安田古宮遺跡では口縁外傾する口縁帯無文土器と結節沈線文を施文した深鉢が同伴して出土しており、小島俊彰氏は規ヶ森様式の最末期のものと同福浦上層様式の始まりの土器という表現で新様式期への転機を説明され、鋸歯状文型式に先行する時期をあてている。

4類としたものは、北白川下層ⅡC式に比定されるもので、石川県下では田鶴浜町大津遺跡⁽²³⁾等で少数例が知られているにすぎない。貼付線文土器(規ヶ森式)の成立や展開に大きく関わるもので、注意を払う必要がある⁽²⁴⁾。新潟県刈羽貝塚出土の隆帯上の列点文をつける類⁽²⁵⁾、新潟県鍋屋町遺跡出土の第2群土器第2類、長野県木曾郡崩越遺跡出土の関西系とされた土器⁽²⁶⁾、長野県上原遺跡出土の第六類土器F種浮線文土器⁽²⁷⁾、岐阜県村山遺跡出土の第3類土器⁽²⁸⁾、福井県小縄遺跡⁽²⁹⁾というように広く中部山地、日本海沿岸に分布しているように思われる。

第2群土器の3類(183は除く)は近畿地方との類縁より、東日本との関連が濃厚なもので、諸磯B式土器として理解したい。それは、長野県崩越遺跡、岐阜県村山遺跡等の中部山地との近似性をより重視するものである。浅鉢器形をまとめた4類についても、同様の位置づけが想定できよう。石川県下においては、この種の浅鉢の出土例は少なく、本遺跡においても胎土、焼成が若干の違いを持つところから搬入土器の可能性が高いと見ている。10類は福浦上層式である。

1、2類の位置づけは西日本、東日本いずれとの判断が困難なもので、3類に含めてしまった183についても黙然とはしないものがある。

結節沈線文、片流れ結節沈線文、結節浮線文は5、7、8類に分類した。各類とも10点以下の出土で器形、文様構成をたどりうる資料は得られなかった。片流れ結節沈線文は新保A遺跡での例を知るだけであるが、その分布状況は今後の検討課題である。

第3群土器の縄文施文のみの類で、復元完形となった第9図30は器形的には黒浜式土器のイメージに近いものを感じさせる。縄文土器で口唇部に列点文、刻目文、縄文を施文するバラエティが見られ、今後の比較検討の資料となろう。

さて、第1～3群土器を編年と対比させて考えてみると、貼付線文土器（第1群1類）を主とするもので小野式とし、貼付線文土器（第1群2類）を主体とし、諸磯B式、北白川下層II C式（第2群3類、第1群4類）を混じえるものを、蛭ヶ森1式として考えてみたい。そして、微隆起線文、無文帯土器（第1群3類）を主体とし、結節沈線文、片流れ結節沈線文、結節浮線文を施文するものを混じえて、蛭ヶ森II式ととらえてみたい。併行するものとして、諸磯C式、北白川下層III式を考えている。後続するものとして、福浦上層I式（鋸歯状印刻文と結節浮線文土器の組み合わせのもの）、同II式（鋸歯状印刻文と細半隆起線文が組み合わせのもの）を試案として考えているが、高橋修宏氏、越坂一也氏⁽²³⁰⁾の編年観とは用語や型式名については若干のズレが生じているが大綱としては変りないと思う。

蛭ヶ森式土器は北白川下層様式の系統を引く北陸独自の様式として理解されていて、北白川下層III式の特異帯文との関連が考えられているが、北陸地域（石川県以東）に限ってみれば北白川下層II a式、II b式の出土はそれほど顕著ではなく数遺跡で断片的に得られていると言う程度である。北白川下層II b式に併行すると位置づけられている福浦下層式は資料の僅少さから判然とはせず、関東地方の黒浜式、諸磯a式に類似する資料の増加が知られてきており（小泉遺跡、石川県中島町大杉谷内遺跡）⁽²³¹⁾、土器の分布圏の再考はもとより朝日c式、福浦下層式土器の内容を検討する必要があるものと思われる。

網谷克彦氏は次の様に指摘している。北白川下層II b式は東日本土器文化圏との結びつきがはじまり新しい爪形技法の導入によって成立したものであるが、II c式は内部的発生とは考え難いものとされ、近畿地方に先がけて凸帯を文様化する東海地方に系譜を求めようとしている。

蛭ヶ森式の成立は北白川下層様式の系譜だけでは説明しきれず、前段階における東日本土器圏の伝統を基調とするものとして検討するべきではなからうか。短絡的な思考としてのそしりはまぬがれがたいが、福浦下層式期が東日本土器圏の西端部に位置している地理的状况から、引き続き東日本土器圏との密接な交流を持続させていたと解し、蛭ヶ森式の貼付線の系譜をたどると、鍋屋町遺跡第2群第2類土器の凸帯文土器が注意される。これまでは同第4類土器の微隆起線文土器が北陸地域との直接的な関わりを示すものとして注目されてきたのであるが、鍋屋町遺跡内での系譜を追えば、第2・4類土器が新旧に細分される可能性は高いと思われる。凸帯文上には竹

管による太い刺突の点列が見られる他、縄文が施文されているものもあり、後者が若干新しいとの指摘も見られる。新潟県には凸帯上に点列をつける資料を出土する遺跡に、刈羽郡刈羽貝塚が知られ、八幡一郎氏は点列文を持つ土器として蛭ヶ森貝塚出土土器に存するとの指摘を行っている。本遺跡では第1群1類(1)、2類A(7、8)の少数例ではあるが、凸帯上列点文の流れとして考えておきたい。試案として蛭ヶ森式土器の系譜を東日本土器圏に求めたわけであるが、京都府北白川遺跡に見られる凸帯文土器が刈羽貝塚、鍋屋町遺跡のものとの類似性も観取され、中部山地、東海地域との比較検討も、あわせて行わねばならないと言え、今後の課題としておきたい。

遺跡のまとめとしては、立地や歴史的背景や石器組成の項にまで至る事ができず、不十分なまとめとなった事を詫言しておきたい。

本報告作製にあたっては多くの方々のご援助があった。遺物整理では荒木繁行氏(石川県埋蔵文化財協会事務局長)、石川県立埋蔵文化財センターの長期研修生であった滝上秀明氏(辰口町)、石橋克美氏(志賀町)の3氏が復元、実測、トレースを行ってくれた。土器の検討、文献の検索については同僚である越取一也氏の教示を受けた。石器の石質鑑定は金沢大学教授の藤則雄博士の教授を受け、石器圏の報告をも受けた。記して深謝しておきたい。(西野)

- 註1 越取 一也 1981 「北陸縄文時代前期中・後葉の土器について」昭和56年石考研究発表会レジュメ
 2 高塚 勝喜 1955 「先史文化」『能登』九学会編
 3 高塚 勝喜 1965 「考古学調査の概要」『石川県羽咋郡田福野両国辺総合調査報告書』
 4 高塚 勝喜 1965 「原始古代の遺跡と遺物」『能登半島学術調査報告書』 石川県
 5 高塚 勝喜 1965 「縄文文化の発展と地域性—北陸—」『日本の考古学』II
 6 沼田啓太郎 1968 「金沢市小野町縄文遺跡」『石考研会誌第11号』
 7 小島 俊彰 1968 「北陸における縄文前期末の様相」『信濃』20—4
 8 橋本 正 1972 「縄文時代前期の諸問題」『富山県埋蔵文化財調査報告書 II』
 9 杉島 孝博 1974 「福浦ヘラソ遺跡」『石川県富来町史』資料編
 10 小島 俊彰 1978 「安田古宮遺跡」『富山県滑川市教育委員会』
 11 越取 一也 註1に同じ、報告書未刊
 12 高橋 修宏・松井 政信 他 1982 「小泉遺跡」 富山県大門町教育委員会
 13 註6に同じ
 14 註8に同じ
 15 橋本 正 1972 「富山県埋蔵文化財調査報告書 II」 富山県教育委員会
 16 柳井 睦、神保 孝造 1975 「吉峰遺跡第4次調査概報」 富山県教育委員会
 17 杉島 孝博 1974 「酒見サンノハザマ遺跡」『富来町史』資料編
 18 高塚 勝喜 1970 「七尾新保A遺跡」『七尾市史』資料編第4巻
 19 註15に同じ
 20 寺村 光晴・室岡 博 他 1960 「鍋屋町遺跡」 柿崎町教育委員会
 21 註7に同じ
 22 沼田啓太郎 1975 「金沢市中戸遺跡調査報告」石川考古学研究会々誌第18号
 23 吉岡 康暢 1974 「原始・古代の田鶴浜」『田鶴浜町史』
 24 大森 莊一 他 1981 「藤の台遺跡 IV」 東京都町田市藤の台遺跡調査会

北白川下層IIc式土器と諸磯B式浮線文土器の起源は、関東地方や近畿地方といった一地域で求める事はできないとし、浮線文土器が各地域に同時に生じたのではないかとの興味ある考えが示されている。

- 25 八幡 一郎 1958 「刈羽貝塚」 北方文化博物館
- 26 神村 透 他 1982 「崩越」 長野県玉滝村教育委員会
- 27 樋口 昇一 他 1957 「上原」 長野県教育委員会
- 28 塩屋 雅夫、大野 政雄 1960 「村山遺跡」
- 29 木下 哲夫、工藤 俊樹 1982 「福井市深坂町小縄遺跡試掘調査略報」『古代』第73号
- 30 越坂 一也 「北陸における縄文時代前期中・後葉土器の綱年について」 近日刊行予定
上記報分の資料および考え方を参考にした。感謝しておきたい。
- 31 唐川 明史氏、津田耕吉氏より教示を受けた。
- 32 網谷 克彦 1982 「北白川下層式土器」『縄文文化の研究』3 雄山閣
- 33 梅原 末治 1935 「京都北白川小倉町石器時代遺跡」



航空写真（南からのぞむ） 撮影 株式会社中央航空



遺跡近景(北から)



調査前の状況(北から)



調査前の状況（南から）



調査終了の状況（北から）



第3号土坑(南から)



発掘区南端部の状況(西から)



土層断面(3グリット)



第3号土城土層断面



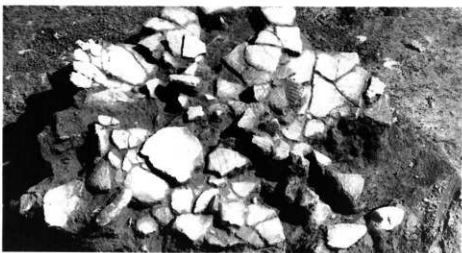
土層断面(Cグリッド)



第 1 号 土 埴 (平安期の土埴器)



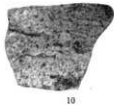
土器出土状況(2~4グリッド)



土器出土状況



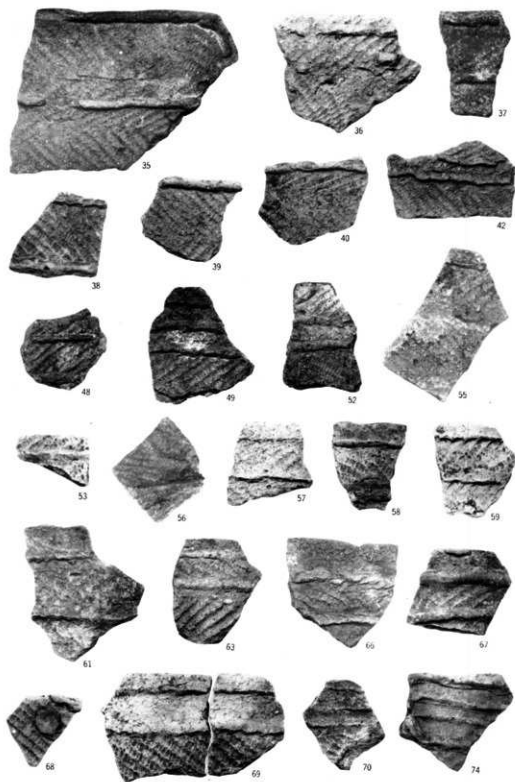
調査風景



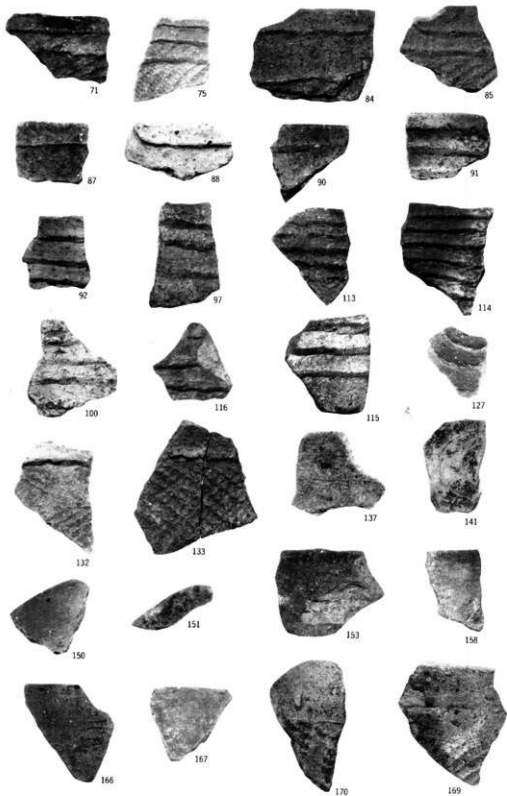
出土土器 (S=1/2)

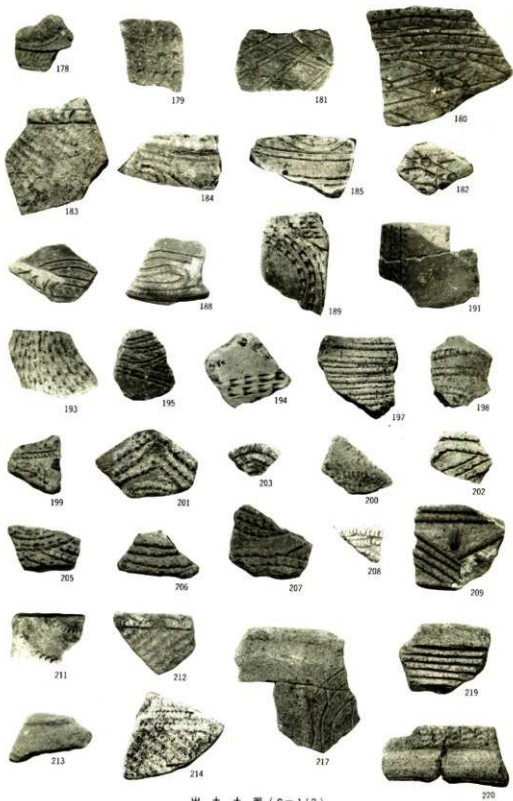


出土土器 (S=1/2)

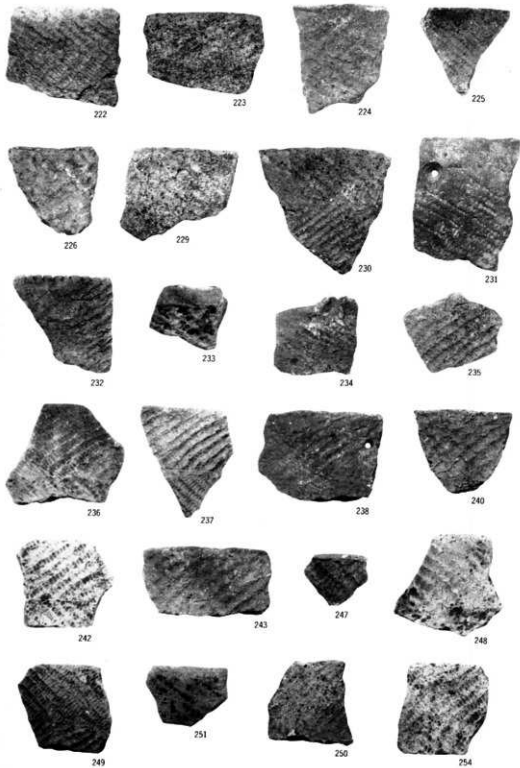


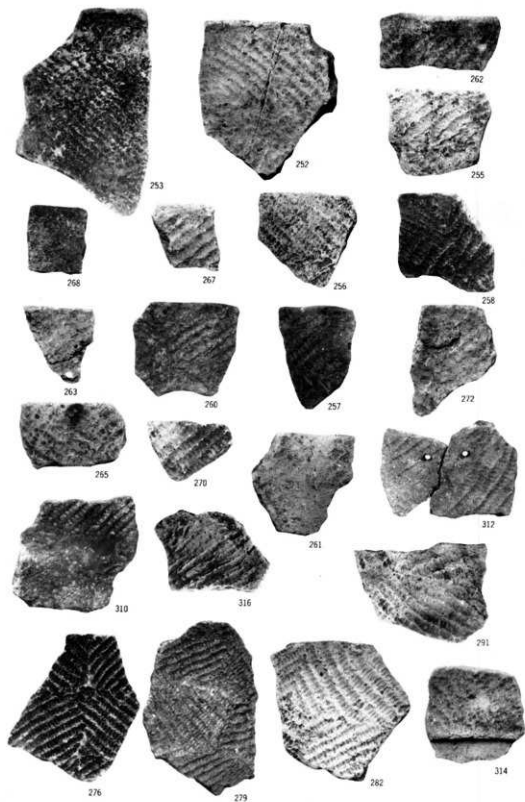
出土土器 (S=1/2)



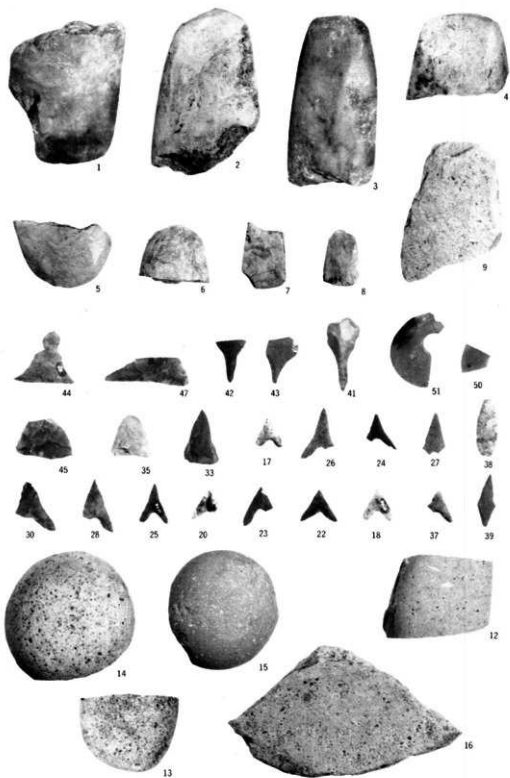


出土土器(S=1/2)





出土土器 (S=1/2)



出土石器 (S=1/2, 1/3)

輪島市三井新保遺跡

主要地方道七尾・輪島線改良事業に
係る埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

発行日 1983年3月30日(昭和58年)

編集者 石川県立埋蔵文化財センター
発行者

〒921 金沢市米泉町4-133

電話 (0762) 43-7692

印刷者 (株)橋本確文堂
〒920 金沢市大手町2-35
電話 (0762) 61-8221